

750-0557



1200500752021

0

55



始



750  
0.55



大隅為三編

支那之民藝

支



933  
482

### 序

八紘爲宇の大精神は發して興亞の聖戰となり、陸、幾百萬の貔貅は自然の壓迫を排して百戰必らず百捷、海、百萬の艦隊は東海の鎮護として敵の蠢動を許さぬ。吾人の決意は東亞幾億萬の人類を敵性國家より解放するまで戦ひ抜くことであり、人類の歴史に大世紀を劃すべく絶好の機會が恵まれたのである。支那を英米の魔手より救はんとして日支事變の惹起をみ、苦闘五年、機構漸くその緒に就かんとすれども、この聖業の礎石となつた吾等の同胞幾十萬の英靈に

對しては心からなる感謝の意を捧げたいと思ふ。

日支兩國の新關係にありては先づ第一に支那を知らねばならぬ。謂ふまでもなく、支那は世界に誇る最古最大の文化をもつ民族であり、假令、彼等五千年の歴史には時に消長ありとしても、その傳統は今日の支那を作り上げたのである。支那の歴史と文化を悉知することは、現代支那を知ることであり、彼等の生活を知ることである。吾人は今日彼等と提携して或は指導し或は彼の足らざるを補ひつゝ、東亞に新文化を建設すべく、其處に功利主義的な態度があつてはならぬ。彼等の生活に理解なく、獨善的に事を處するは寧ろ長い傳統に生きた彼等の生活を改廢することである。彼等を文化的に誘導開發せんとすれば第一に同情である。例へば彼等の爲に作る細かなるものもありても、彼等の傳統、彼等の趣味を忘れないことが彼等への親切である。これは一日の長をもつ吾人の彼等に對す親愛の表示

ともなるものである。

支那庶民の日用雜器或は民藝の展觀を催し、或は圖説を刊行して關係者の注意をひき多少と雖も裨益するところがあれば、かゝる方面にも日支提携の實が擧げられたことにもなるが、勿論今直ちに凡てにわたり完璧を期することは出来ない事情にありとは雖も、唯我が工藝家や業者の研究資料となつて、他日斯る事業を完成さるゝ人々のよすがともなれば吾人の目的は果されたといつてよい。

編者の本書を成すに當り、隨所に印度、波斯や西歐の古代に於ける傳説其の他に些か觸れた譯は、あらゆる文化は單獨に發生するものではないといふこと、支那の文化が他の文化に密接な關係がありその交流の結果が片々たるものにまで現はれてゐるといふことを強調したいからであつた。

本計劃を遂行すべく、吾等と同様なる意圖の下に華北交通株式會

社或は百貨店高島屋が多大の犠牲を拂つて吾等の企圖を援助し且つ實現せしめられたことに對しては深く敬意を表したい。

尙本書圖版が悉く臨摹描寫になつたことは物の細部を一層詳しく説明したいからであり、その衝に當つた人は、我が金工界に知らるゝ矢島甲子太郎氏である。茲に篤く同氏の勞を感謝しておく。

大隅 爲三 識

### 支那庶民常用の工藝

支那は四億萬以上の同種民族による一大國家であるが、これを歴史的に見ると周代頃より清朝に至る各王朝の生命は大抵三百年ほどの壽命であり、其間には名君や傑物の一人や二人は必ず現はれて文化建設に努力し燦然たる時代的光彩を放つてゐるが、しかし何時の時代でも王侯貴族や政權者などの所謂少數階級には特殊な生活があり、心身の兩方面に閑日月を有つてゐるので、文學は勿論美術や工藝に關心をもち、凡ゆる援助を惜まなかつたので、工人は想を練り技を競ひて天下の名品は自然に生れたのであつたが、それは恰も我が王朝時代や徳川期の三百諸侯が美術家を庇護して文化を促進せしめたと同じである。かくして貴族階級向き什器や調度に傑作が作られた譯であるが、名君出づれば必らず名品がある。藝術品による時代相は歴史



の記さぬところを最も明快に物語るのである。さて、本格的な支那の文化は唐宋までで、元の美術は宋の追隨であり、明となり清と降つては我が徳川期の藝術を彷彿せしめ、其代表建築としての日光廟は乾隆の感覺である。

併しながら何時の時代でも権力者の庇護の下に生れた藝術は、必ずしも民族の趣味に通ずる所産だとはいへない。貴族階級の大衆に對する存在は、いはゞ一對無限大ともいふべきものであつて、かゝる人達の趣味による作品は民族の名による工藝、若くは庶民の用具と稱することは出来ぬ。大衆の生活には極めて實用的な工藝を要求するが、唯、貴族藝術の範圍にいるべき作品と雖も同じ民族の所産であり、大衆の趣味と相通するものが多い。上流の愛好する模様と形には庶民と雖も相當に理解をもちその用具に多少ながらも貴族的工藝の氣持を加味したがるのは當然だ。陶瓷、金工、漆器、皮革、

竹細工、唐木細工などみな、その標的を貴族藝術におき、形と模様の摸倣によつて安價なる満足を求めてゐる。常に目指すところは高級品だが製作技術の及ばぬところのものが所謂庶民向きの工藝である。従つて良心的な制作をそれ等に望むことは無理だ。漆器は支那が本場であり、舜の時代既に器に漆を塗つたことが古記に見え、コプロフ氏が庫倫に近いセレンガ河の邊りから発見したもの、或は同時代に出来た朝鮮樂浪の漆器を見れば孰れも洵に立派なもので、漢時代の漆藝が全く本格的なものであつたことを説明する。かかる西曆前の漆器が今日に至るも原態を保つてゐるといふ事實は確かに漆を生かしてゐるからであらう。時代の降るに従ひ、漆は器の素材としてよりも塗料乃至は防濕材として普遍的に用ひらるゝやうになり、漆藝は茲に影をひそめるに至つたのである。明末より今日に至る大部分の支那漆器はいはゞ間に合せものであつて永久性をもたぬ。

刻糸即ち綴織でも宋の徽宗皇帝時代のものは織り上げのみによつて充分の効果を擧げてをり、宋以前は更に優秀な作品のあつたことを推想せしめるが、明代となれば織糸だけではよい効果が出ないの顔料の補筆を要所要所に加へ、清朝のものには彩差しを當然として刻糸の存在理由を失つてゐるが、これに據つても藝術的良心は時代の降るに従ひ、墮落の傾向をたどるものと云ふことがわかる。刺繡と雖も同じことで、今日では此の技術を知らざる婦女子は殆んど無いまでに一般化されてゐるが、何人が明の顧氏繡を凌駕するほどの技能をもつてゐるであらうか。陶瓷も亦宋まである。明清は或る意味に於て支那陶瓷のルネサンスと見ることは出来るけれどもすべからず、更に亘つて品格が違ふ。假令技術的に見て相當の冴えはあつても、宋以前の深みある作品には及ばぬ。唯、明の陶瓷に進歩と見るべきものは染付に成功したことであらう。そして、明朝の嘉靖、萬曆、

天啓などの作品を見て清に及び、雍正、乾隆の作品に比較する時自ら明清の傾向を察知することが出来る。支那に於ける工藝を通觀すると、時代と共に品格が下り、制作に良心を失ふやうになつてゐる。吾人は寧ろ民藝或ひは日用の雜器類に於て漢人の質實なる性格と本格的な制作態度を發見しやうとするものである。

### 支那の本格的民藝

支那民衆の使用する器具といへば大抵類型なものが多く、文様は傳統的な在り來りの意匠で骨董品でもなく荒物でもない、使ひ古した或物が興へるやうに暗い感じであるが、しかし、一步足を厨房に運び、邊りにある道具類を見ると始めて支那民衆の堅實なる生活様式を實例によつて表示されたやうに感ずる。庖丁、鋏、小刀や爐邊の

器具は勿論、柳材の蒸し桶、さては打ち出し(鍛金)による手附鍋などの合理的なる形、井戸には柳條を編んだ釣瓶、杓、籠類、或は院子などの掃除用の塵取、箕、籠などすべては長い経験が生んだ形であり確かな構造である。華人の生活用具は美術品ではないが、しかしそれは生活の表現である。一對の箸、一本の小刀、一個の木鉢も常に長き使用に堪へるやうに作られ、經濟觀念に鋭い彼等は形式的に形を整へるよりも丈夫なものを求めてゐる。即ち日用器具に於ても華人らしい堅實性を示してゐるのだ。染織にして支那の民藝ともいふべきものは、危険な染料を避けて我が浴衣の如き藍染の印花布や、我があゝる地方の手織物の感じである太原や石門の綿毯布の如きがあり、孰れも支那民藝の純朴性を物語つてゐるものではなからうか。

所謂民藝は土に着いた生活から生れたものでなければならぬ。必ずしも先覺の指導を俟たない、獨自の感覺から自然に發達し、都の

趣味に汚れないものであらねばならぬ。陶器でも天下の名品は民窯には生れ兼ねるけれども、氣取りといふ不快なものゝ存せぬところに價値がある。終日終夜、埴を粘して形を作り、干上げてはこれを焼く。傳統的な文様を簡單につけてはまた焼く。そこに民藝のたふといものがあるのだ。

民藝に加ふべきものに絨毯がある。氣候と生活様式から必需品の一つとなつてゐる。材料たる獸毛を求めるとは容易なことも此工藝が各地に行はるゝ所以である。又これに類せるものに毛氈がある。毛を壓搾してつくる。無地毛氈、染毛氈の二種類がある。

絨毯は北京や天津の工場に於いて製造し、所謂天津絨毯として世界的に知られてゐるが、文様はいふまでもなく平凡である。寧ろ民藝品の絨毯や毛氈に愛すべきものが多い。蒙疆の厚和や包頭方面の製品に文様のよいものがある。本格的な絨毯工藝は相當大仕掛な組



織を要し、染色工場をも必要とするので、農閑でも利用して織らうとする人達にとつては特に此點が不便であらう。北京や天津製品でさへも、染に至つては完全といへぬ位であるから地方の品に成功したものはないと見てよい。染料を用ひず毛の持ち色を巧みに利用し文様化した絨毯に優品がある。新疆省より中央亞細亞方面に到れば、勿論高級品が織られてゐるが、近來は植物の染料によらず化學染料を用ひてゐる。しかし、この染料の驅使には研究が不足してゐる。従つて褪色變色は當然起る。民藝家には化學染料が手に入らぬので粗惡な糸を求めて模様に加へてゐるが悪い趣味だと思ふ。又蒙疆方面の毛氈は包の外壁や屋根、疊代りの敷物にも用ひて用途は非常に廣い。敷物用の毛氈には藍や朱、脂臘、黄などの色を丸染にしてゐる。文様を加へたものは例の如く十字文や虎の目絞りが多い。これ等の壓搾毛氈並びに絨毯の染法は未だ原始的ではあるが適當な指導を與へ

たならば相當優等品を製出し得ると思ふ。

皮革を素材とした民藝品は至つて多いが、上手なものにも皮革材のあつたことは我が正倉院の御物を拜見しても首肯される次第であるが、これ等の多くは漆を塗つて美觀を添へ、同時に濕氣を防いだ所謂漆皮の器具で支那では古い時代から行はれてゐる。又、一見練り皮の如き煮皮と稱するものさへ乾隆時代には試みられてゐた。皮革材民藝品は大抵革のみで本格的に漆加工を施したものは鮮ない。旅行用具、手筈、枕、提げ物、胴亂、馬具附屬品等に多少の漆の加工品がある。土族民藝の素材として皮革の加工は先づ鐵篋を以て生皮に附着せる汚物を取り去つた後、單に石灰加工を施すに過ぎない。容器作製には生皮或は半滑しの皮に充分水を含ませ、質を軟かにして形を作るに便ならしめる。出来上りは相當硬いけれども再び濕氣を受けると原形を破壊する懼れがあるので、木胎をもたないものには外部

には漆や特殊な樹脂の防湿加工を施さねばならぬ。用途の上から濕る懼のないものは生皮の儘だ。例へば四川省などで製造されるスベード形烟草入、小胴亂の如きをとつて見ると、些かの防湿加工をも施さず、しかも形を崩さないだけの用意を加へてゐるが、さうした縫目なし一枚革の胴亂の製作工程は極めて簡單である。皮の馬具や鞭などは民藝品として扱ふべきものではないが、植物纖維による綱の得難い土地にあつては、革の強靱性を利用して紐などに利用してゐる。以上述べたやうに、皮革は蒙古人や支那人の生活には缺くべからざるものゝ一つとなつてゐる。

竹は熱帯、亞熱帯、温帯地方の一部に繁茂する植物であつて、その根幹は強靱であり弾力性を有つ。外皮は、恰も年ふりて磨かれたる木工品を聯想し、或は巧妙なる漆器の感觸をもつほど滑らかである。南支に産する竹材は肉厚にして加工には至つて便利だ。器具や

家具の素材としては木材に次ぐ良質なものと思ふ。又用途によつては種類多き竹材中より適當に選擇することが出来る。又華人の技術のみが生む竹筵、シーツの如きは竹材の特性を巧みに捉へたものである。竹材は應用の自由性があるため、凡ゆる方面に用ひられてをり、中には立派な構成美をもつものさへ發見される。

支那の民藝に屬すべきものゝうちで比較的作品範圍の狭いものは木工である。家具調度用の硬質木材としては紫檀、黒檀、花梨等の如き南支、佛印、ビルマ方面の材料を使用するが、原價、送料、加工費は相當高額に上るので、大衆用には不向きな素材である。北支方面の普通品はすべて軟質木材であるが、しかし、それ等の多くは弾力性をもち、却て加工には都合がよろしい。華人は家具の本格的素材を紫檀、黒檀に置く以上、軟質材の寢臺、机、椅子の如きも塗料によつて硬質材の自然色に近い仕上げを歓迎してゐる。大衆の家具調

度は概して柳材であるが、農民用の鋤、鍬、馬鍬、鎌などの柄に用ひるものは、或る自然木を其儘利用してゐる。静かな、そして安易な生活を營む爲には木材が要る。支那人には植林を奨励すべきではなからうか。

### 漢人の色感

色の表現は民族の附け札である。或る光線に接し、其感覺を顔料染料等の物質によりて表現し、これを色と名づく。併しながら其處に民族獨特の質と量との異りがある。祖先を共にした或る民族が集合し、相關的な生活を營む時に於て自づと生まれる民族の持ち色は血族的、因縁的、肉體的なもので、他民族の影響から、漸くにして民族的持ち色の基調が出来る譯ではない。吸収し反射した光線を網膜に受け、これを識別する機能は既に該民族の肉體的構成によつて

運命づけられてゐるものである。先天的に附與された色調が、文化の程度に於て同じ量と質との精緻に進む可能性はあるが、本然的の色感はその民族から離れるものではない。吾人と漢人は同文同種だといふ。共にモンゴリヤ族であり、吾人が漢字の知識をもつといふ點のみに於て同種同文族なりと云へないことはないが、それは極めて大掴みな見方であつて條件的には首肯けるけれども、日支兩民族の附け札たる色感といふ、はつきりしたものが之を許さぬ。

色彩は物質であつて光ではない。物質である限りは絶対的な透明性をもたぬ。即ち光線の質と量とは凡ゆる民族に同じ強さを以て放射するのであるが、感受する民族の肉體的構成が假令、同一條件の下にあつても表はすものゝ等しくないのは當然である。華人の感受する光線は吾人の夫れと同じ質量であつても、等しい感覺を以て表はれては來ぬ。且つ又光線を約束の色に轉寫する場合は必ず或る物

質によらねばならず、その上、絶對的平坦な素地面なしとすれば、華人と雖も感得した色感を充分表現し得ないのであるから吾人も亦華人の色感を同等に味ふことは困難であり、況んや「好み」には相通じないものゝあることはやむを得ぬと思ふ。古代漢人の色に對する感覺は頗る鋭敏であつたことはその時代の繪畫彫刻工藝建築等に施された色によつて知ることが出来る、そして色の配合と調子は殆んど完璧といつてよいが、此の觀察と雖も今日吾人の感覺による批判に過ぎない、果してそれが本當の漢人のもてる感覺であつたかどうか。施された色が物質である以上多少は變色したのもあらう。明清より現代に至る華人好みの色彩は長い傳統と高い文化時代を経て高度の色感を有つてゐる筈であるが、明清時代より漸く退廢期に入り、洗練された古代の色調を失ふに至つた。彼等が今日殆んど無關心に塗抹するところの色彩は所謂原色に近いものであり、五千年の

文化と傳統の墮落であるといはねばならぬ。宋の克糸に見る色系の驅使とその調子には優雅にして繊細な階調があり、色感に於ては最も鋭いといはれる佛人をして驚嘆せしめたほどであつたが、華人の今日ほど「色」褪せた時代と對比し、何人と雖も無限の感慨をもたない譯にはゆかぬ。例へば本蒐集の凡てにわたり、色彩から出發した工藝乃至は日用雜器がどれほどあるか、繡の作品は大小、數十點を數へることが出来るけれども、明繡の如き藝術は暫く措いて問はずとするも、純朴ながら階調ある朝鮮李朝の繡を聯想するやうな、大衆工藝として色感に獨特の良さをもつものがどれほどあるか。

### 支那の傳統的文様の考察

支那の傳統的文様は四靈を始め怪獸饕餮吉祥文、魚介植物等極めて多岐に亘るけれども、要するに自然を美化し便化し、所謂文様装

飾として扱はれてゐるものは甚だ鮮ない。唯僅かに漢鏡、海獸葡萄鏡の背面裝飾とか、蜀江錦などの如き特異な實例をもつが、しかしそれ等の文様は西歐との文化交流の結果現はれたもので傳統的な意匠のうちに加へることは出来ない。富貴幸福を求めて縁起のよい物の形を什器調度は勿論、衣服建築にまでも施して安全なる生活を祈る。彼等は壽、福、喜、吉等の文字を陶器や漆器、金工品等に書いてゐるが、其等の文字は器物の裝飾文様ではなく、華人はその意味と共に生活することが彼等の慰安であり、希望がみたされたやうな感情を抱くのである。そして日用雜器の末に至るまでさうした文字を書き加へねば措かぬ。支那は文字の國といはれてゐるが、華人大衆は文字に對する憧れをもたぬ。唯字義を喜ぶ感情に至つては到底吾人の想像を許さぬ。

所謂支那の傳統的な文様は彼等の祖先から傳はれる意匠であつて、

華人にはその孰れもが生ける存在となつてゐる。信仰に根ざし、迷信に育まれて來たものであるから、彼等の感情からこの傳統的な文様を奪ひ去ることは到底出来ない。日月星辰は又一つの實在とし、天象の實體であるとしてゐるけれども文様意匠としてそれ等の宇宙現象を表はしたものは至つて鮮くない。擬人化した五星二十八宿をもつ彼等は、天空現象を文様化することに考へ至らなければならぬと思ふけれども、天といひ、天上といふ言葉と意味は悉く彼等の信仰を支配して文様化し圖案化するの大膽さをもたなかつたのであらう。既に天空を表現し得ぬ彼等は、雲を描いて天體とした、雲に凡てのものを托して天界とした。雲は千變萬化、文様の意匠としては自由であり且つ豊富な形がある。即ち雲を文様として生かしたものは我が美術家を除いては支那人であらう。華人の構成になる雲の形は西に流れて波斯に入り、小亞細亞より西歐諸國の文様中にも影響を與

へた。雲のモチーフを *clouds* 若くは *sky* と呼んでゐるが、これは天の支那音である。西方亞細亞、歐洲の圖案に見る雲の形は、いづれも同じ形式であつて、華人の創案を改變する餘地がなかつたのであらう。回教徒が常用する祈禱用絨毯で、小亞細亞、ジオルド製のものには、その中央文様となつてゐるモスクの上方には、雲を織り込み上天の意味を與へてゐる。雲が天界を意味する漢人の考へが、そのまゝ西方諸國に移つてゐることがわかる。華人は雲に對して霞と霧との形式を生んでゐる。繪に遠近を與ふべく困難を感じた場合、雲を用ひ霞の線を利用して距離を與へた。如何にも支那人らしい考へである。以下龍鳳、饕餮其他支那傳統の意匠に就いて、簡単な解説を試みたいと思ふ。

### 龍

漢民族の象徴ともいふべき龍といふ人間の想像が生んだ靈體は、

上下幾千年の久しきに亘つて物象的實在と認められ、各々の時代的色彩を帯びて凡ゆるものに現はれてゐるが、その文獻もさすがに文字の國だけあつて寔に多いけれども、その發達變遷などを組織的に記したものはないやうである。周時代の輒に見える龍は、恐らく支那龍の初期に屬したもので、漢代頃から形に様式が出来、宋、元、明、清と時代の降るに従ひ龍の形式は益々複雑精緻を極むるに至つたけれども、原始的様式のもつた崇重な味ひは段々稀薄になつたやうに思ふ。しかし、その形式の變遷を辿れば、自ら時代の様相を窺ふことも出来る。しかし龍の形式を創造して子孫に譲つた原始漢民族は、その龍に就いて獨自の見解をもつてをつたかどうか、或は他の民族より支那本土に移入したものとすべきかどうか。又漢人の龍は形からではなく、名があり字があり、従つて形が生まれ、それが段々複雑になつて來たものと假定すれば、比較神話學の泰斗ユウジエーヌ・ピユ

ルヌフ Eu. Burnouf の名高い定理 *Nomina Numina* は龍によつて説明せらるるのである。圖案としての龍は普遍的で、支那、印度、西歐、地球に到るところの民族が意匠として扱つたものである。漢人の龍に對する命名は鱗あるを蛟龍、翼あるを應龍、角あるを虬龍、角なきを螭龍、未だ天に昇らざるを蟠龍とし、各性能を異にすと述べ、瑞祥を意味する龍には五色が備り常に萬年の壽を保ちて死せず、天下泰平の象徴と考へてゐた。龍は水蟲の神、鱗蟲三百六十蟲の長、水を得て能を表すとす。後代に至つては龍は變化自在にして一度息をはけば雲となる。雲を龍と見てゐる記述もあり、雨とも關係し、落雷をも龍と見てゐる。漢以前の龍は水中又は雲中にをり唐宋時代より蛇の形をとり、清朝では五つの爪が龍、四個若くは六個は雲蟒とした。以上は漢民族が文字を弄んで龍の種々相を作り上げたに過ぎないけれども、他の民族も亦、等しく龍を靈體と認め、相當の傳

説と物語りを作つてゐる。しかしそれ等は孰れも支那龍の創作時代と同様相當の古い時代にまで遡らねばならぬ。中央亞細亞と波斯の龍、印度の龍、希臘のドラコーンの如きは最も古くホーメロスの詩中にも見えてゐる。龍の形について比較的詳細に述べてゐるものは西曆後、間もなく小亞細亞カッパドーキヤに生まれたピタゴラス派の哲人アポロニウスである。彼が印度に旅行して龍狩りに參加した印象記の一節中ネメアの龍に就いて次のやうに語つてゐる。

「丘地に棲む大龍はその行動迅速にして恰も激流の如く、頭部には鶏冠あり、齡を経るに従ひ赤色を帯ぶ。背には鋸齒の如き鱗あり、鬚を生ず。鱗は銀の如く、瞳は寶石の如き輝きをもつ。齒は巨大な野猪のそれの如く、深山に棲む龍の鱗は黄金色で、ちぎれた鬚も亦黄金色である。瞳は眉の下にかくれ、地上を這へば青銅の響を放つ。その鶏冠は炎炎たる焰の如く赤色である云々」とある。龍は必らず

しも漢民族の想像のみが生んだものではなく、凡ゆる原始民族のもつた靈體である。偶、漢民族は想に勝ち文字の上に巧妙なる表現を試み理想的な龍の形體を創造したもので、ピユルヌフ氏の定理はこの意味で眞理に近いと思ふ。

### 饗 養

支那古代に於ける饗養 Tac-Tieh 紋は四靈と同様興味の高い文様であり、支那の原始文化の交流を物語るものであるが、しかしその饗養紋に關せる文獻は鮮く、その系統を闡明することは至難なことであるが、唯字義としては、財を貪り飲食をむさぼる意味と解し、或は惡獸の名と解するに過ぎない。周時代の銅器には饗養紋が多く、それ等は正面向きの獸が幾何學的の統制と便化とを経て構成されてゐるものであるが、これ等は恐らく西域人を象徴せる猛獸虎の假面と

の關係をもつものと思ふ。饗養の如く自然物を便化し圖案化したものが周のやうな古い時代に案出されたことは、紋様發達の順序からいへば不思議なことである。即ち原始人は寫實を追ひものに即し物の實體に近からんことを望み、文化の進展につれて形の便化が行はれることは文様發達史の示すところであるが、饗養紋の如く自然の形態を極度に便化し得るまでには、その身邊の人、動植物、日常生活に親しい花卉は勿論、果實もまた文様の意匠として扱はれることが順序だと思ふ。即ち凡ゆるものを圖案化し文様化するには人體、動物、更に進んでは植物に及ぶわけであるが、饗養の如く猛獸の面貌をあれまで極端に様式化した文化人であつたなら、他の自然物をもまた、文様の上に大きな役目を果させねばならなかつた筈だ。茲に支那古代文化と深い接觸をもつスキタイ文化を見落す譯にはゆかぬ。スキタイ人は金屬工藝に特技をもつた遊牧の民で、希臘文化の



影響をうけ、黒海沿岸を出で、東は中央亞細亞より蒙古滿洲にまで進出してゐた民族である。それは今日極東各地から出土する幾多の金工木工染織品等によつても知ることが出来る。西曆前はるかに古き時代より前一世紀頃に亘り、亞細亞の地に活躍した彼等の遺跡は學者の研究によつて漸く明かならんとしてゐるのであるが、ペトログラードのエルミタージュ博物館所藏のアルタイ地方から出土した木工藝品中の高度に様式化した正面向きの獅子頭、或は同地方のカタンダ墓地より出土した木製浮彫などを見ると、吾人は直ちに支那の饕餮假面の祖型プロトタイプであるといふことがわかる。しかし斯くの如く様式化された動物紋様の起原は何處であらうか、或は希臘から小亞細亞、中央亞細亞と逐次支那方面にまで進み、その間に形が段々便化されたものと考へられるのである。又、饕餮假面は支那龍の頭首をも聯想して考へねばならぬやうに思ふ。

## 鳳 凰

鳳凰も支那では四靈の一つであつて空の鳥、瑞祥を意味し、天下泰平を象る靈體である。華人が意匠として凡ゆるものに好んでこれを寫すことは龍と同じである。泰西諸國にまでもその氣品あり圖案的な形體は織文を主として廣く傳はつてゐるが、しかしフォーン・フォアンは支那の鳳凰であつて、希臘のフェニックスと同種のもではない。フェニックスといふ靈鳥の語源はフェニキヤである。フェニキヤは紅の産地として有名であり、染織物には紅を好み、國風なる頭部の被り物も又同じく紅色であつた。希臘人はこの靈鳥の赤い鶏冠をフェニキヤ人から聯想してフェニックスと名づけたのであるが、此鳥も同じく靈鳥として傳へられるところから支那の鳳凰と混同したのであらう。即ちフェニックスは唯一無二の靈鳥であつてアラ

ピヤの沙漠に六百年間生活して後埃及ヘリオポリス市に出現し、自ら祭壇の灰と化し、再びその灰燼中より若く美しき姿となつて蘇生し、更に又六百年を経て同じく化生する輪廻轉生、極まることなしと稱せられる想像上の鳥であり、支那の鳳凰とは性格上全く異なつたものである。兎に角鳳凰の起原を何時に求めていゝか、卒かに斷ずることは出来ないけれども、支那の文様と鳳凰とは離すことの出来ない關係にあつて、龍鳳の形は立體工藝の暗示とさへなつてゐる。銅器陶器は勿論、建築等の細部、或は民藝のうちに加ふべき下手工藝に於てさへも意識せずして鳳龍の動的姿態の一部をとり入れてゐる。

#### 麒麟と貘

麒麟も鳳凰と同様支那文様に屢々現はれる靈獸であつて、牝を麒

といひ牡を麟といふ。聖人出でて王道行はるれば麒麟見ると信ぜられてゐる。これに稍似た西歐の靈體にはグリッパスがある。グリッパスなる言葉は印度・歐羅巴語の語原「攫む」といふ言葉から出たものであつて、體の一部は鷲、一部は狼。スプインクスやハルビエス等と同じく好奇的な形體で麒麟よりも寧ろ源三位頼政が禁中にて射落したといふ鷓に近い。故に麒麟はグリッパスと全く屬性を異にしてをり、靈獸として龍鳳の如く表現の自由性をもたず、極限された範圍に於てのみ繪畫、文様、彫刻に寫されてゐる。此處に些か麒麟を語るべくグリッパス即ちグリフォンに觸れて見た譯は、十四世紀頃から西歐織文の上では在來のフェニックスとグリフォンがキーリンとフォン・フォアンになつてゐることである。この事實を知れる人は公正にさうした文様を麒麟模様鳳凰モチーフといつてゐる。即ち織文西漸の一例として擧げたい爲であつた。

貘といふ怪獸は熊に似、黄黒色の猛獸で、夢を喰ひて邪氣を除くといふ。唐の世之を屏に描くと記されてゐるが、此の種の靈怪獸は時代により地方によつて、益々その數を増し、一々之を解説するこゝとは迎もその煩累に堪へぬ。

龜、鹿、蝙蝠、蝴蝶、魚介、植物其他

龜も亦四靈のうち數へられ、鹿は蝙蝠と共に福祿を意味し壽老人などと連絡があり、萬壽無量、富裕、幸福、生活の安易を望む心理はこれ等の動物によつて現はされてゐる。幸福と富貴即ち福祿は蝙蝠の語音で、その形は希望の表現である。物の形と美に惹きつけられ、或ひは文様として物を美化するの意味から描かれたのではなく、常に長壽を望み、地位高く物質豊かならんことを蝙蝠にしよばせてゐるのであつて、かうした文様の喜ばれたその裏面には長年月

に亘る社會生活の不安があつたのだ。

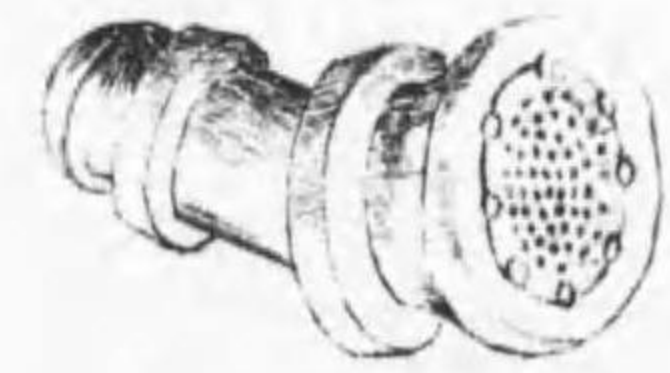
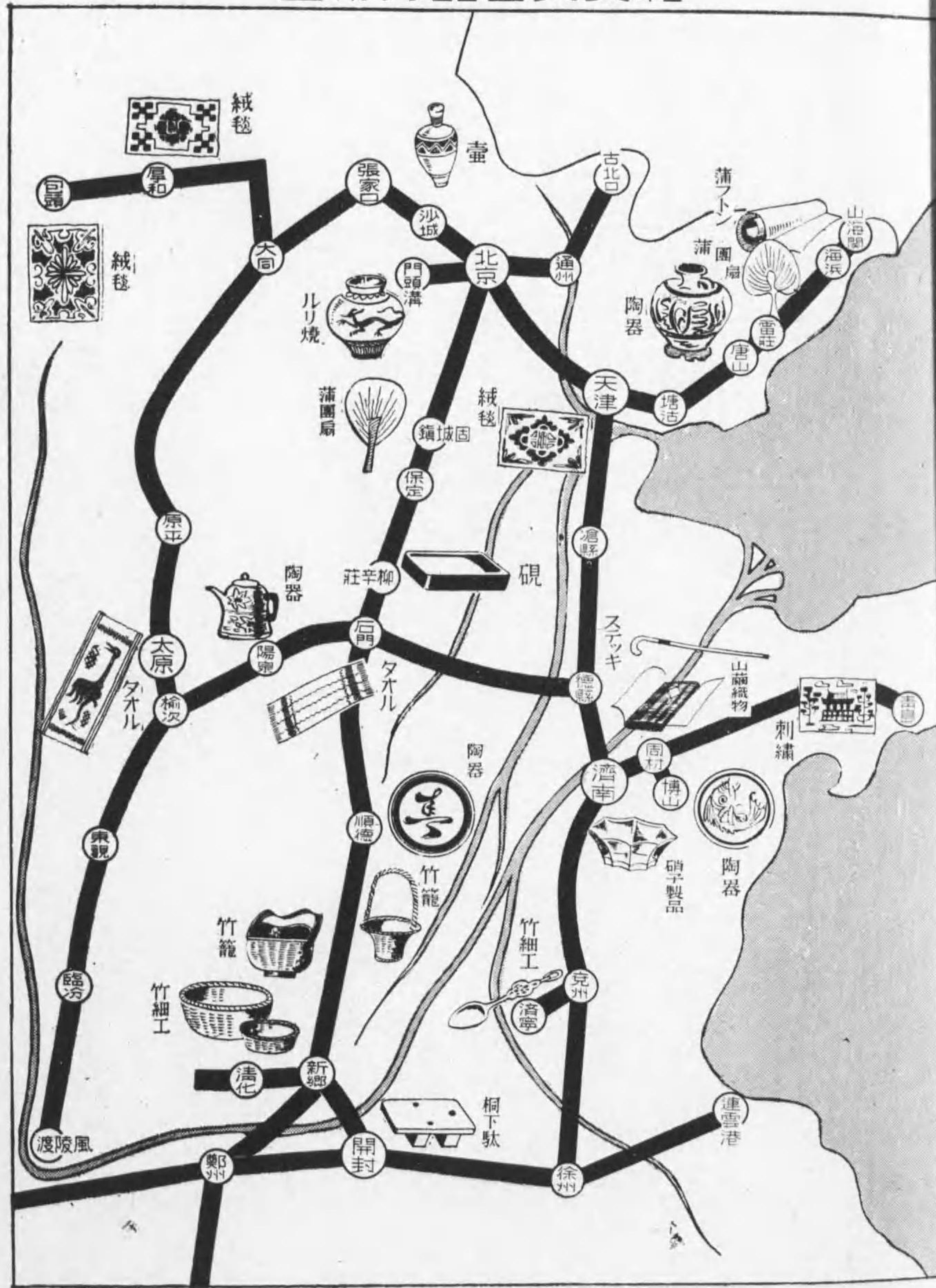
昆虫も亦意匠として扱はれてゐるが、特に蝴蝶は周代この方銅器の縁模様などに頗る便化した形をもつて現はれてゐるが、蟬は清虚にして變を識るといふ意味に於て冠の如きものゝ飾りにさへなり、蝶はその姿と翼の美より愛情の象徴として單獨に、或は花模様に加へて描かれてゐる。魚介の多くは河川湖沼のものが多く大洋の魚族は鮮ない。其の他意匠として扱はれた禽獸魚虫は尙相當の多數に上るけれども、文様としての効果を狙つたのではなく、生活の希望と迷信を織り込んだものに限られてゐる。植物の方面では主に花物、又文様としての風景は主として人物山水、繪畫の形式を踏襲したもので單獨に文様として獨立したものはすくない。

吉 祥 文

吉祥を意味する華人の欣ぶ形體模様はまことに多いけれども、獨立文様としては先づ卍を挙げねばならぬ。南京市郊外に於ける一公館の門を泰平門といふ。その門の中央には唯一字、卍を彫つて裝飾としてゐるが、門の名稱に適應せしめたのであらう。支那では古代から十の字を知つてをり、極、至、完といふ意味で、時間と空間に遍満する意味をもつてゐる。説文には「數之具也」とあり、十全、又は十善といひ、共に完備の貌を十の字で表はした。Summum bonum 即ち至善の意である。卍の創作されたのは十の字より遙か後代であるが吉祥如意萬壽無量平和等を意味したことに疑ひがない。佛徒は經文をひいて、萬祥萬德之集所と解してゐる。その意味でも泰平門の卍は平和の象徴であり、吉祥萬壽萬德の意味をもつてゐるのであ

る。梵語ではスヴァステカ (Svastika) といひ、字義を分解してみると「よきところのもの」といふ意味をもつてゐる。日の出の象徴化でもあり、繁榮主義のサムボルでもある。この意味に於て支那の建築、工藝に單獨の卍と、その發展したもの、省略したもの、連續文様が古代から行はれてゐる。この外、芽出度き物、富貴を意味する物、長壽、親睦の形等は屢々織文器物の文様として隨所に見えてゐるが、これ等は所謂大衆の理解し易き縁起物で茲に一々解説する餘白をもたない。

# 北支民藝品分佈圖



麵類押出器

圖

版

## 金 工

庶民用の金工品といへば鐵、眞鍮、銅、白銅、錫などの製品が多い。眞鍮は合金率によつて銀を聯想する白銅に近いもの、又金のやうに發色の際立つたものなどがあり、用途によつてその率を違へてゐる。銅の食器である限りは必らず盤陀をその内側に布くことを忘れぬ。錫は茶器に最も多く、白銅の器も相當用ひられてゐる。鐵器は鍛金のものが多數を占めてゐる。鑄造品もある。厨房の諸器具には鐵と銅の器が多い。蒙古人は銀を喜び、銀貨を裝飾とするほどであるから、特

に庶民階級では白銅を銀の代りに愛用する。これを蒙古銀といふ。土耳其石、珊瑚、瑪瑙等を鑲めた裝身具さへ多くは白銅である。支那の器には把手に二つの種類がある。稍高級なものは開閉式で、大家もの、薬罐など、多くは手が胴についてゐる。どれもみな、丈夫を第一として取り付けは確かなものだ。支那の大家は物扱ひに丁寧さがないので陶器は破損するものと考へてをり、鋸止めなどが流行するのである。支那人は破損しやすい陶器よりも金屬による器を用ひる。大家の用ひる金物類には優等品はなく、大體同じ形式のものだ。

## 薬罐と手爐

此眞鍮製薬罐は打ち物で、胴には人物、蓋にはの龍の陰刻を施してゐる。多分破損した底部に部分的修理を施さず、受け皿のやうな形のを充行がひ盤陀で不器用に接合してゐる。それは胴と底の眞鍮金質が異つてゐることでもわかる。文様の彫は巧みなものだ。恐らくは清朝工人の製作であらう。

小暖爐は同じく眞鍮製である。蓋の部分は風景で暖爐としての實用性を顧みつゝ、湖面の波を籠目に組んで換氣に便じた。胴面には同じく人物山水風景、何時もながらの構圖であつて、奇抜なものを見ることは出来ぬけれども文様として落着いた氣持を興へる。優れたものだ。

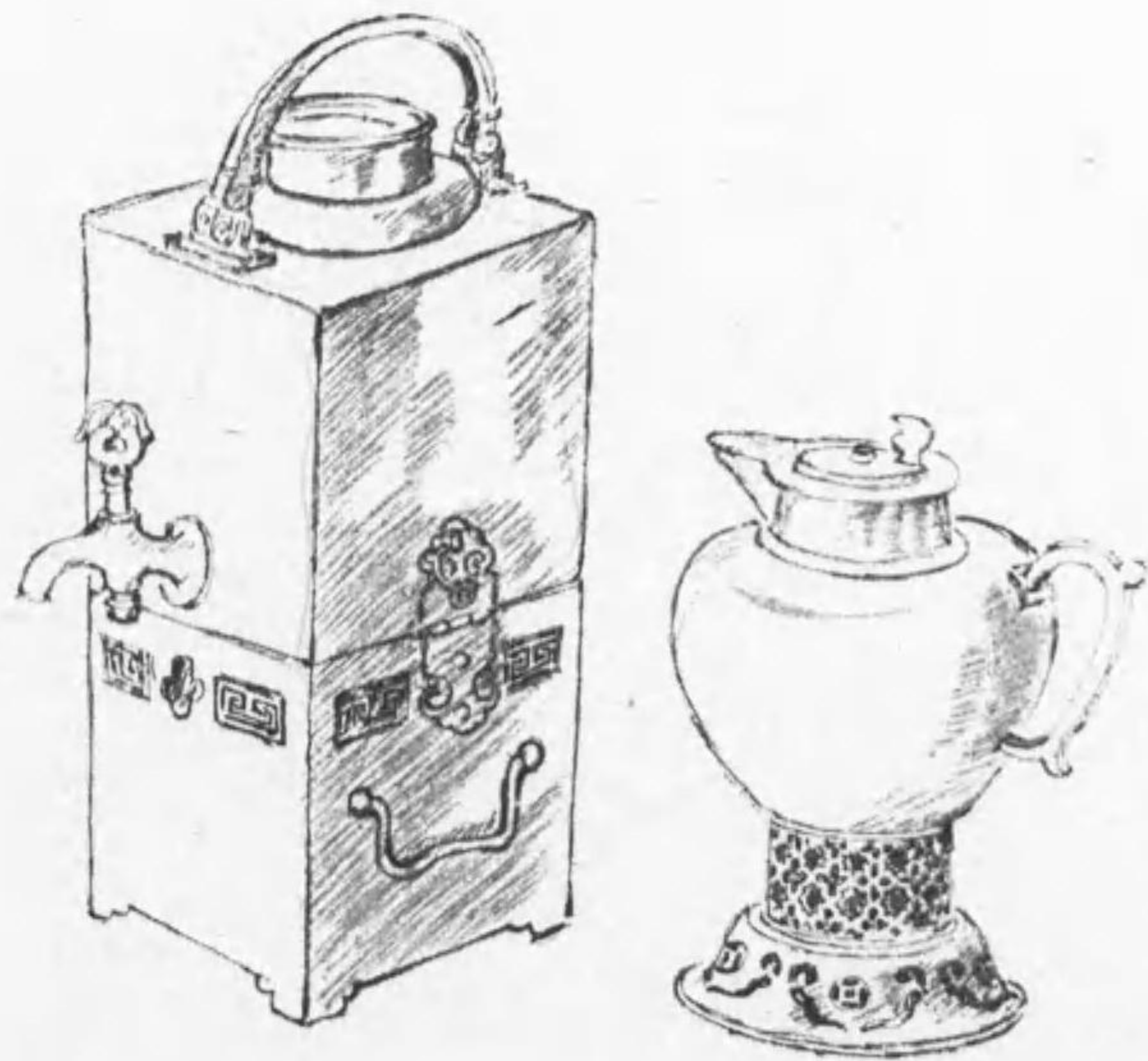
薬罐 高サ 三十浬  
手爐 直徑 三十浬



湯沸し二品

材料は眞鍮であるが、合金の配合率から白銅に近い光澤である。右小形の湯沸しは上方が急須のやうな形であり、注ぎ口と手、肩の張り工合、或は蓋についた撮などみな合理的な構成で、支那の調度品には稀に見るところのものだ。透し彫の文様にも一々、存在の理由をもつてゐる。大形湯沸は稍構造が複雑であつて、湯沸しといふよりも寧ろ支那式サモウルといった方が適切である。湯漕の中に茶の用器として錫製のおとしがある。下にはアルコール・ランプを入れる部分があり湯漕には蛇口（ロビネー）がついてゐて湯や茶を注ぐに便してゐる。

角長形湯沸し 高サ 二十四糎  
小形湯沸し 〃 十七・五糎



蒙古乳注と肉池

材料は眞鍮と素銅で、内部は錫鍍金である。銅の部分には雲龍、鳳の文様、構造はしつかりしてゐるけれども、胴廻りの眞鍮の箍は蒙古人の好みか、しかしこれがあるがために丈夫な感じを興へることも確かだ。

北京製で蒙古への輸出品である。乳注ぎの下には眞鍮製の肉池がある。中側肉池の部分は銅、蓋の内側には鏡のやうに石板を張つてゐる。すべて朱肉の變色を避けての用意であらう。台口は極めて正確で支那の金工としては珍らしいほど精緻巧妙、蓋の上面には裝飾として文字の陰刻がある。



乳注ぎ 高サ 三十一糎  
肉池 巾 十 糎



飾 笠

眞鍮で蓮、唐草の打抜き透し彫の笠燈籠の飾りである。一見  
繊弱な感じを興へるけれども、構造の上から堅牢なものとなつ  
てゐる。文様の蓮唐草は唐宋の傳統から享けた構圖であつて線  
には充分のはたらきがあり構造美の一要素となつてゐる。

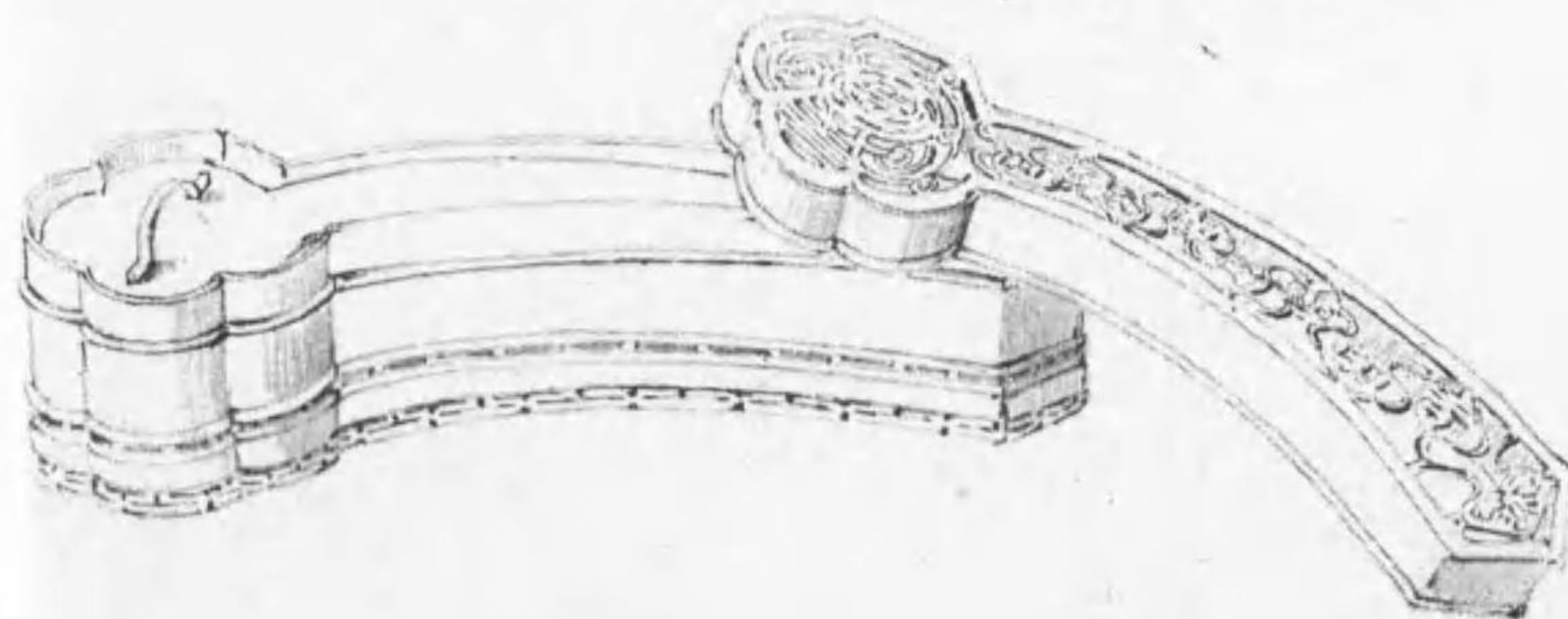
高サ 二十二寸



如意形香爐

素材は白銅と素銅で組立式構  
造である。内部には透し彫のか  
げこ、押へ板などがあり、殆ん  
ど無意味と思へるまでに複雑な  
組織をもつ香爐である。合口も  
よく一種の構成美をもつもので  
はあるが、香爐といふ以上は如  
何なる香をたくものか、筆者は  
詳かにしない。文字と七寶とを  
蓋の透し彫としてゐる。

長サ 二十六・五寸



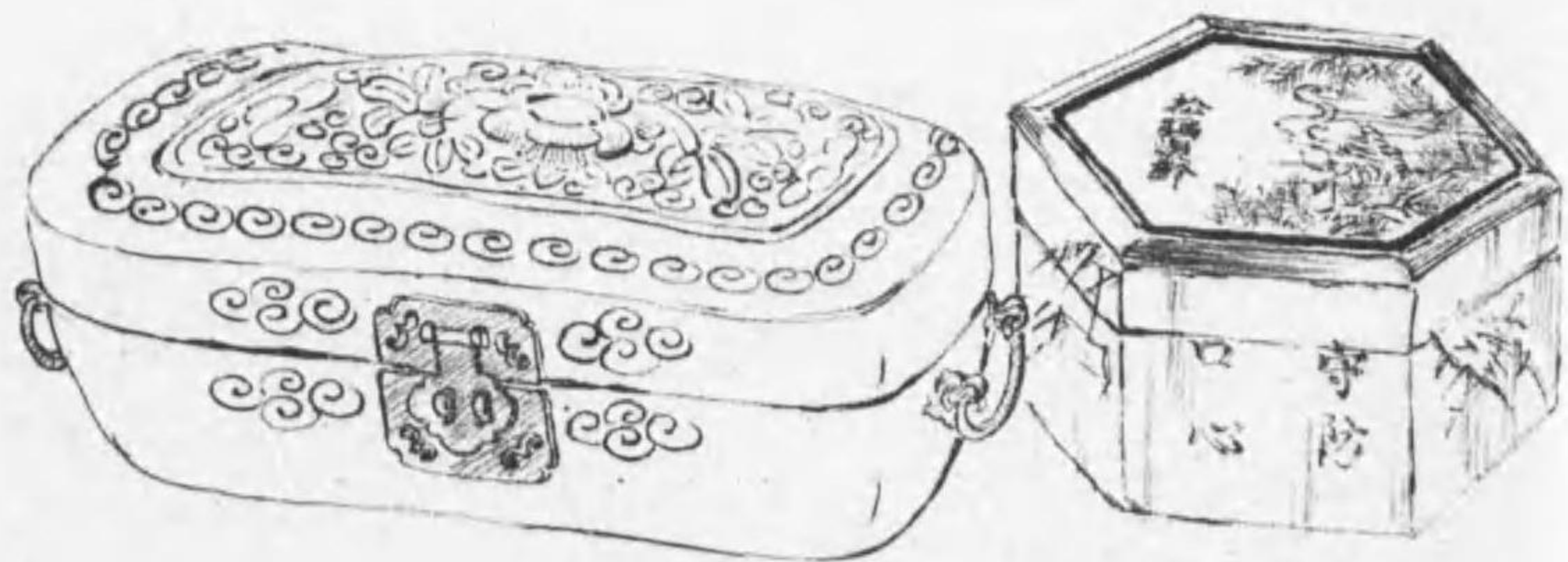
竹皮製六角小箱と漆皮手篋

竹の外皮を薄く剥いで木材の胎の表と裏とに張り附けたものである。  
六角の各面には竹と文字とを相互に彫り込み、合口を揃へてゐる。本品  
にとるべきところ、學ぶべきところは太い竹の外皮を巧みに剥いで下地  
の木材に張り附けた技巧である。一見黄楊の感じを興へるほどに面の接  
着に態とらしいところがない。吾人はかうした技法から何物かを引き出  
すことが出来るやうに思ふ。

圖版の左は漆皮手篋で、勿論下手物である。外部は朱、内部は黒の漆  
であるが、塗り下が如何にも粗末で丈夫とはいへぬ。金具は例の如く申  
し譯程度で何等見るべきものをもたないけれども支那大衆用の手篋とし  
ては先づこの邊のものではなからうか。

竹六角小箱 高サ 八・五寸

漆皮手篋 長サ 二十六寸



手提・酒杯・小皿

木竹製である。手は竹幹の合理的な構造で中は二段となつてゐる。朱漆塗で箔繪模様は例によつて蓋には蝙蝠、胴には柘榴、佛手柑などを描く。食品を運ぶ用具で全く華人好みの構成である。圖版の下部に見えるものは酒杯と小皿で、共に朱漆を塗つてゐる。素地は革で漆皮の下手物である。杯や小皿の如き食器に皮の素材を用ひることは用途の上からよい考へだと思ふ。

手提	高サ	三十三寸
小皿	大直徑	八・七寸
同	小	八・三寸
酒杯	高サ	五・六寸



木工藝と竹細工

北支方面の木材による民藝品の素材といへば先づ柳くらひで、松柏材も多少は得られるけれども、その量にはなほだ渺い。紫檀、黒檀、花梨などの硬質木材は大部分が南方方面の産であつて大衆向きの家具や調度の素材にはならぬ。柳の幹は大形なものを作るべく、細き枝は適當な時期に採取して之を編み、日用器具を作るに便利なものだ。籠類、箕、釣瓶などがある。之に豚の薄皮を張つた油籠、鹽菜籠などは木樽以上に實用價值がある。陶器硝子の類は破損し易いけれども柳

材の油籠などはその危険をもたぬ。

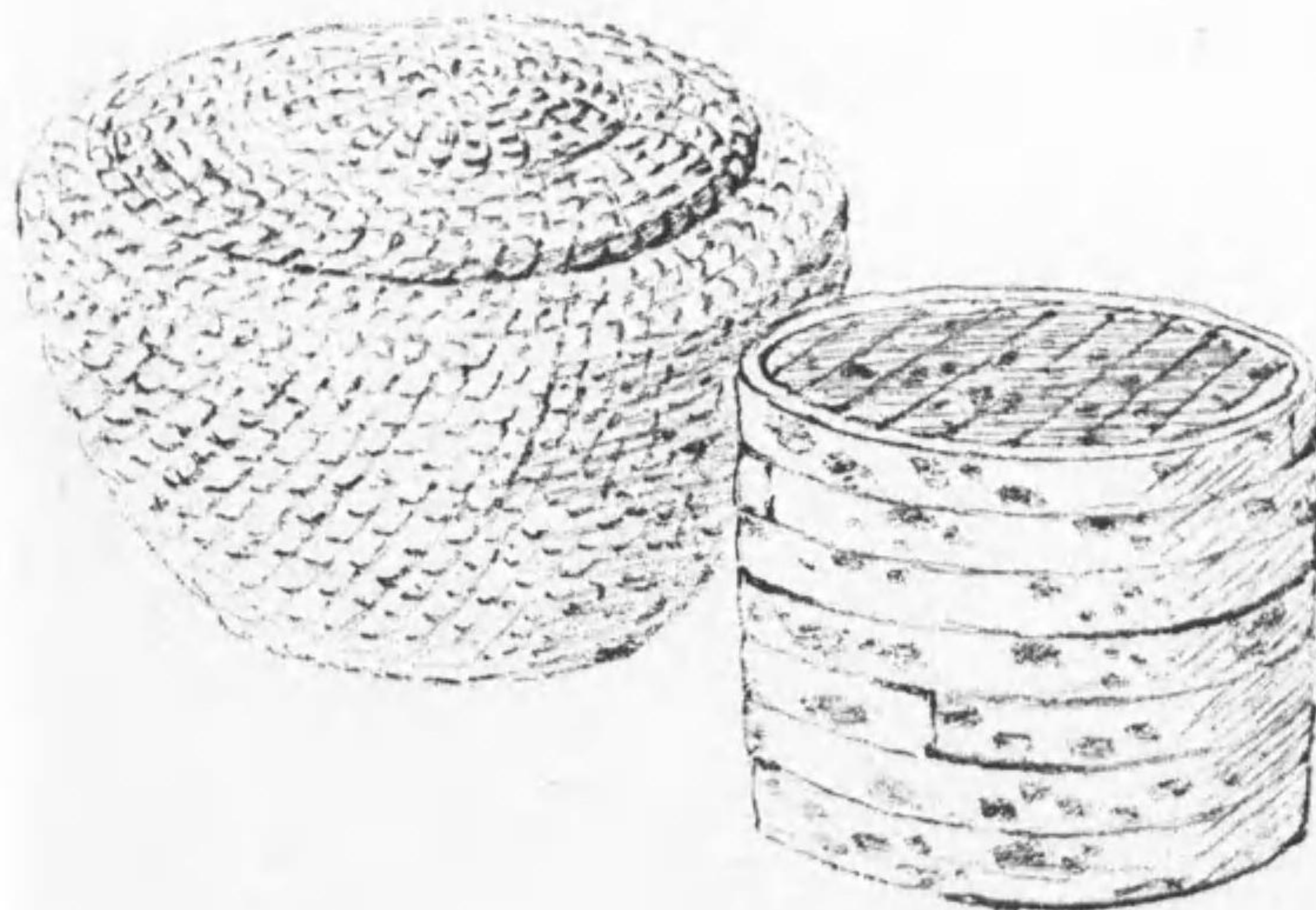
竹は北支の植物ではなく、需要を充たすだけは産せぬけれども、中南支には豊富にあるので大衆用の工藝素材として充分だ。北支では清化縣一帯が竹細工で名高い。製品は主として農民生活の必需品で、正統な民藝的としても健全なものが多い。竹は寒竹と稱して、冬期に採伐するのが普通で、それも四五年経つた老竹に限る。

丸形竹製曲げ物と籐編碁石入

紋竹を胴廻りに積み重ねた小箱、軽い氣持の構成である。竹と竹との結びとして胴縁の上から下へ芯を通してゐる。蓋の面には同じ竹を張り内部には黒漆を塗り、組織は堅牢、素材を活かしたところに興味がある。新しい感覺の工藝といへよう。

碁石入れは籐製である。漆をうすく塗つてゐる。下手物ながらこの丈夫さをとりた。

- 曲げ物 直径 十・八寸
- 碁石入レ 十四・五寸



竹製品三品

圖版の右に見える中部打抜き、環状の箱は珠數を納めるもので、仕事は極めて精巧、左の丸形蓋物は雅致あり愛すべき構造ではあるが、技術的には稍劣るものと見なければならぬ。中央の手提げは例の如く食品を運搬するに用ひる器であつて、上下二段、全部竹製である。本品は外側と内側の編みを異にしてゐる。食品の糊着を避けるために内部には透明な漆を塗つてゐる。表蓋の繪は巧みではないが華人はかうしたものを悦ぶのである。

- 竹細編二段蓋付手提げ 高さ 二十一寸
- 珠數 宮 直径 十七・八寸
- 竹編丸型蓋物 十四寸

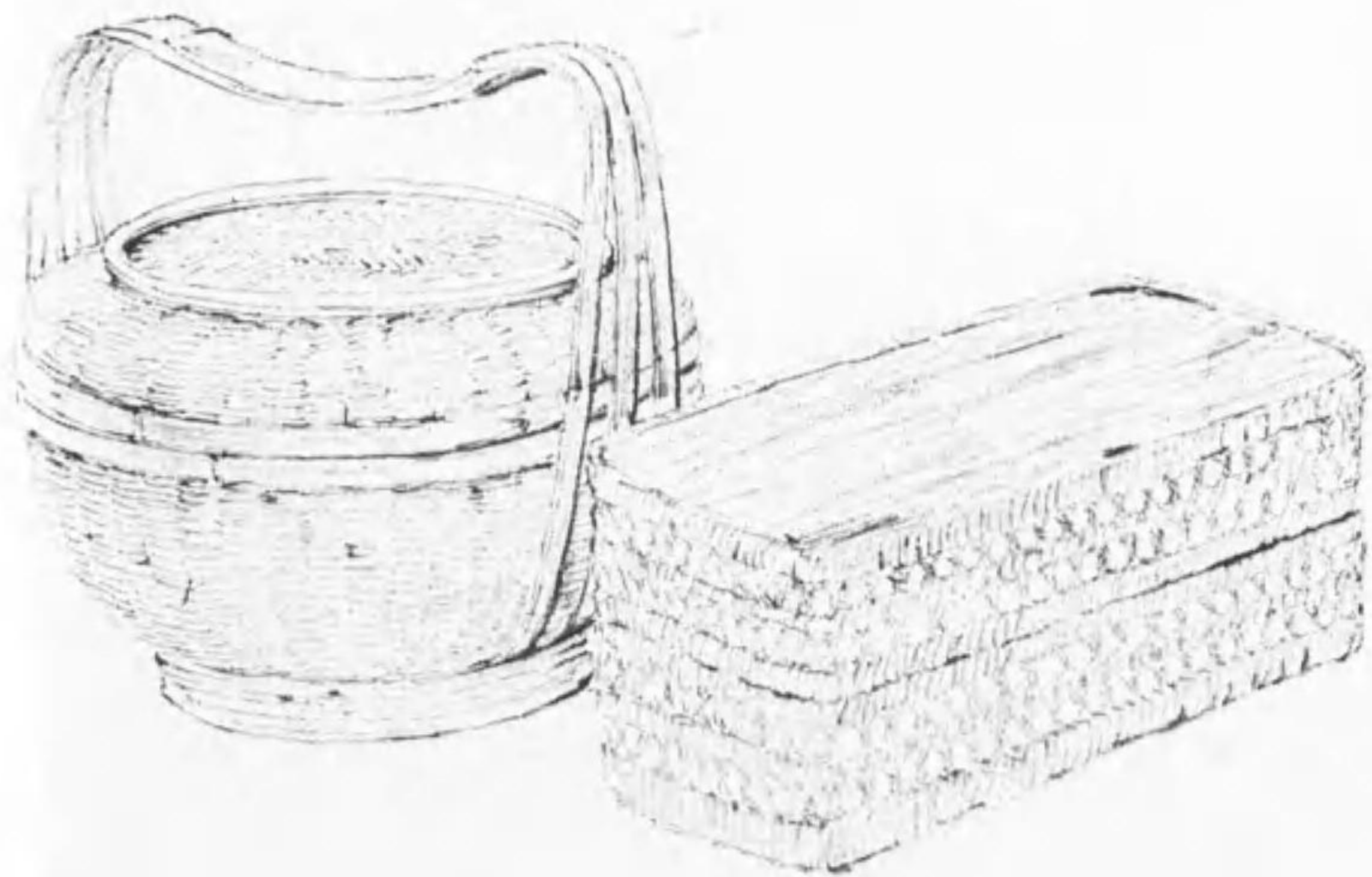


竹製提げ籠と籐の編籠

提げ籠は竹細工で下手物ながら形は整ひ、丈夫に作られてゐるが、支那の竹細工品としては高級なものには屬せぬ。把手は寔に合理的に造られてゐる。丁度手の觸れるところは肉厚で耳の部分だけは稍薄めとなし、接合部を三本にわけて重量を平均せしめやうと企てゐる。

籐を細かく編み上下を蔽ふに木板をもつてし、蓋には朱漆を塗抹してゐる。籐の編み方は巧なものだ。

竹提籠 直径 二十二・五 寸  
籐編籠 高さ 十一・八 寸



明朝時代の籠彫建築裝飾

明時代の建築裝飾の一部であつて庶民工藝のうちに加ふべきものではないが、支那の木工家の秀でた技術の一例としてこゝに掲げることにした。便化した牡丹に一羽の鷺と牡牛を配した立派な圖案の構成である。籠彫といふ言葉は我國工藝家の術語であつて、特殊な透し彫である。神社佛閣等の建築裝飾に屢々試みられる、表裏に同様の模様を刻み籠のやうに間をあけてゐるもので、透し彫としては最も困難な技



術である。本品の製作當時は箔と朱、群青、緑青、白緑等の礦物質顔料をもつて彩られてゐたが落箔の都度、泥繪具で補修した跡が見える。木材は硬い桐を用ひてゐる。

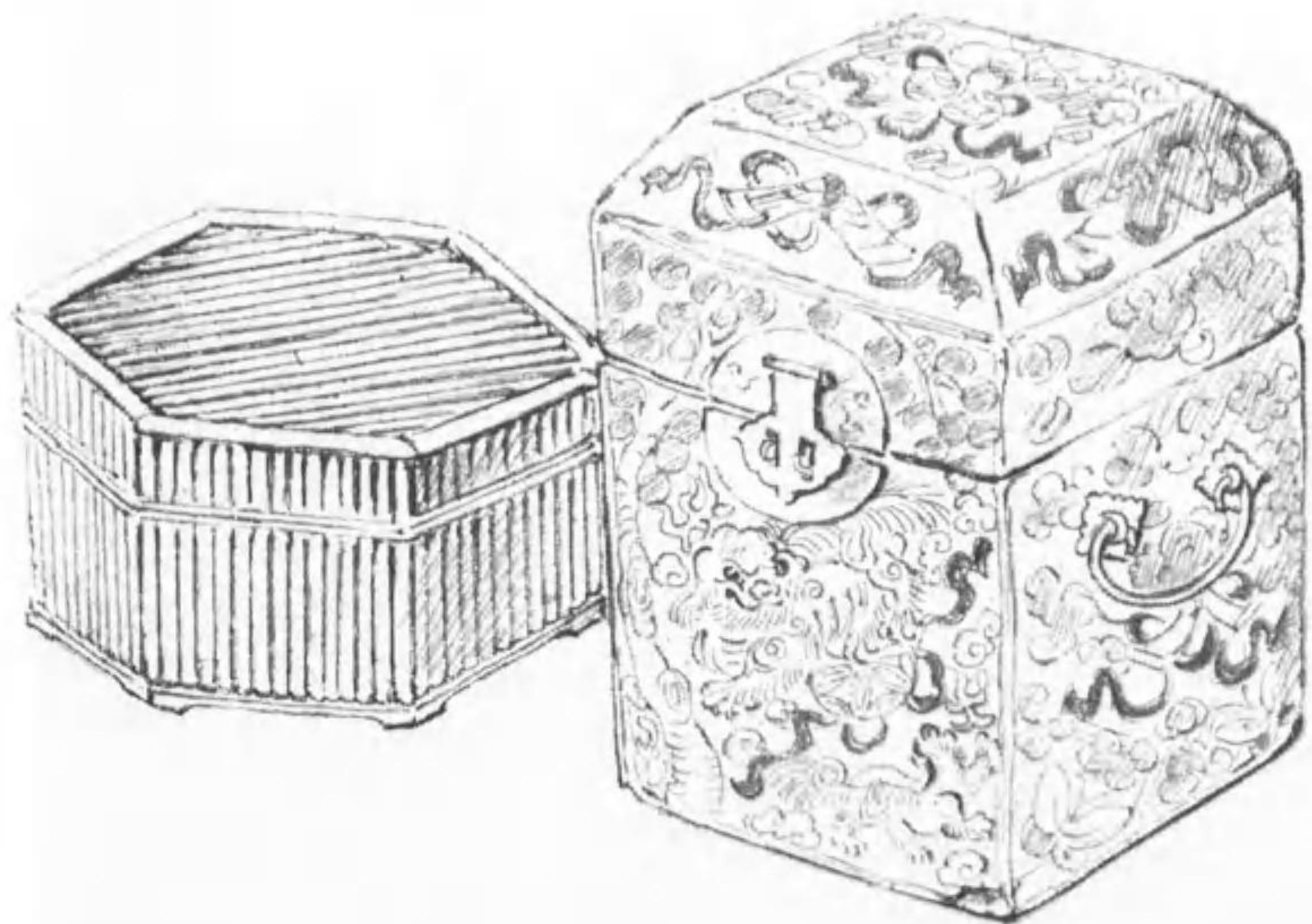
六角小宮と印鑑櫃

六角竹製小宮の生地は木材でその上に矢竹を半截して張りつけ、これを緑の紅木で引き締めてゐる。内部には布を張り底は竹皮を布く。趣ある小宮ながら構造は拙く、他の多くの竹細工品に比し繊弱な感じを與へる。

圖版右の印鑑櫃は朱漆に吉祥文、獅子などの文様あるもの、胎は木紙である。構成の上からは朝鮮李朝の櫃には及ばぬ。殊に漆の塗り方が粗末である。塗り下の厚い層が漆皮の觀を與へるのであらう。

六角竹製小箱 高サ 八・三浬

朱塗文様入漆印鑑入 〃 十六・五浬



朱塗桃形蓋物と丸形蓋物

桃形の蓋物は漆皮、用途は菓子器であらう。朱漆は僅かに素地の上を塗るに止めて、その次の加工を缺いてゐる。支那の漆藝は大抵此の程度である。文様は我が時繪の形式を學んだものではあるが、粉によらず、箔を漆に置いたまゝである。金色は落ち、黒漆のデッサンだけが残る。

朱塗丸形蓋物の花卉胡蝶文の塗料は漆ではない。この蓋物の素地には革を用ひ布を貼つたもので、本来からいへば相當堅牢であるべき筈だが、残念なことには下地となつた層の研究が不十分なために、必らずしも丈夫な構成とは云へない。

桃形蓋物 直徑 十九浬

丸形 〃 〃 二十九浬





折疊み引出付鏡臺

紅木製で、婚嫁の持参調度でもあり、又婦人の化粧具の一つでもある。蓋を開け、前方の小箱を左右に展開すれば小引出しが四つとなる。すべて此の種の鏡臺は仕人物で長き使用に堪へない。金具も丈夫ではなく李朝の鏡臺と較べて遙かに見劣りがするやうに思ふ。

高サ 二十・五種

小箱 三種

圖版の右は紫檀製小箱で蓋の表には獅子の浮彫があり、粗い刀使ひながら素朴な感じが出てゐる。用途は婦人用小物入れであらう。中央は六角化粧材の小箱で葉茶入れである。蘭・蓮、花鳥などを象嵌してをり、仕事は拙ないものだが、大衆用の茶箱としては大抵この程度のもを出ないであらう。左は紅木製蓋付小形鏡匣である。蓋は相當凝つたもので、螺玉等の材料で浮彫人物風景を貼つてゐる。内部は粗末なものだ。

- 紫檀 小箱 高サ 九・五種
- 化粧六角小箱 十六・八種
- 紅木蓋付鏡匣 五・四種



螺 鈿 小 箱

貝象嵌の漆器は大抵の場合高級品であるが、支那では所謂下手物にも屢々この種のものを發見する。其等は鮑貝が多く、品格のたい輝きをもつてゐるが、本圖版の二品は共に蝶貝である。文様は平凡だが地との調和は洵によろしい。併し朝鮮李朝ものと同様、生地たる箱の木組に至つて粗末で潔癖な日本工人には辛棒の出來ないほどの仕事であり、漆の下地も上塗も同じ程度の技術だ。

高サ 大 八・五 寸

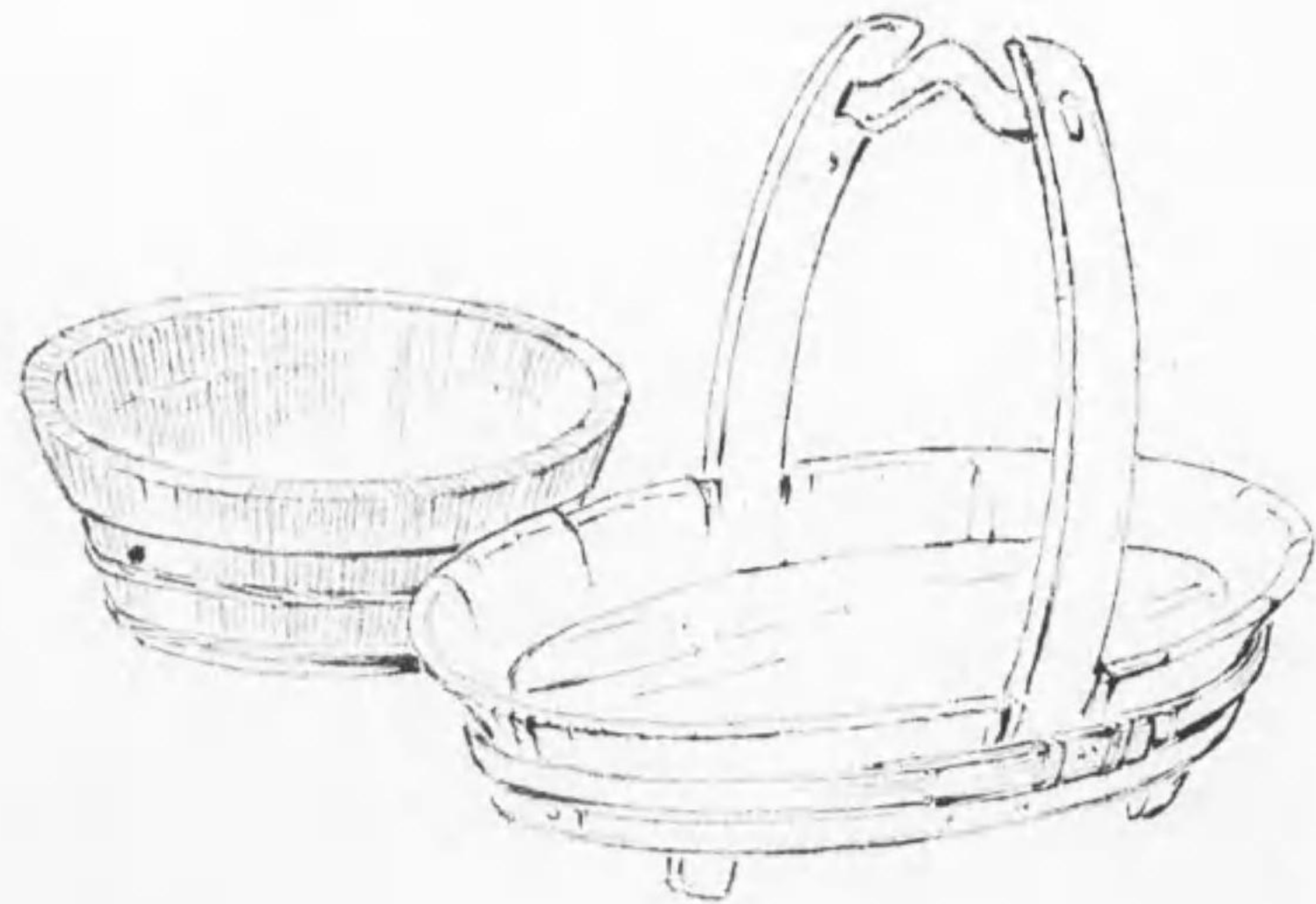
小 三・八 寸



手 提 と 小 盥

橢圓形の盆で果物食品などを盛る器。その手に腕を通して運ぶこと恰も我國の「おかもち」に類す。凡そ華人である限りは南と北とをとはず日用器具としてこれを用ひる。此手提げ桶は天津によい物があると聞くが、北京では路傍などで無雑作に作つてゐる。長い経験からこの形を生み出したのであるから、一寸手のいれやうもないほどに合理的な構成である。下手のものになると、有り合せの木材を用ひ、それが偶然にも軟硬の木質となり自然に收縮と膨脹を調節することになつた。手の曲線に多少の變化はあるが、あの張りのある形は動かすことは出來ないものだ。手の曲線に準じて胴の傾斜も亦力學的である。南支方面にはこの構造に類する手桶があつて、まことによい形である。圖版の右は小盥で、材料はいふまでもなく木材であるが、一分を出ないほどの色變りの木を重ね、胴廻り全部では三四百枚の板を要した譯だ。相互の板は木質を異にしてゐる。見込は例によつて箔置き金の魚、漆を春慶風にぬつてゐる。

(手提 高サ 四十一 寸  
盥 直徑 三十六 寸)



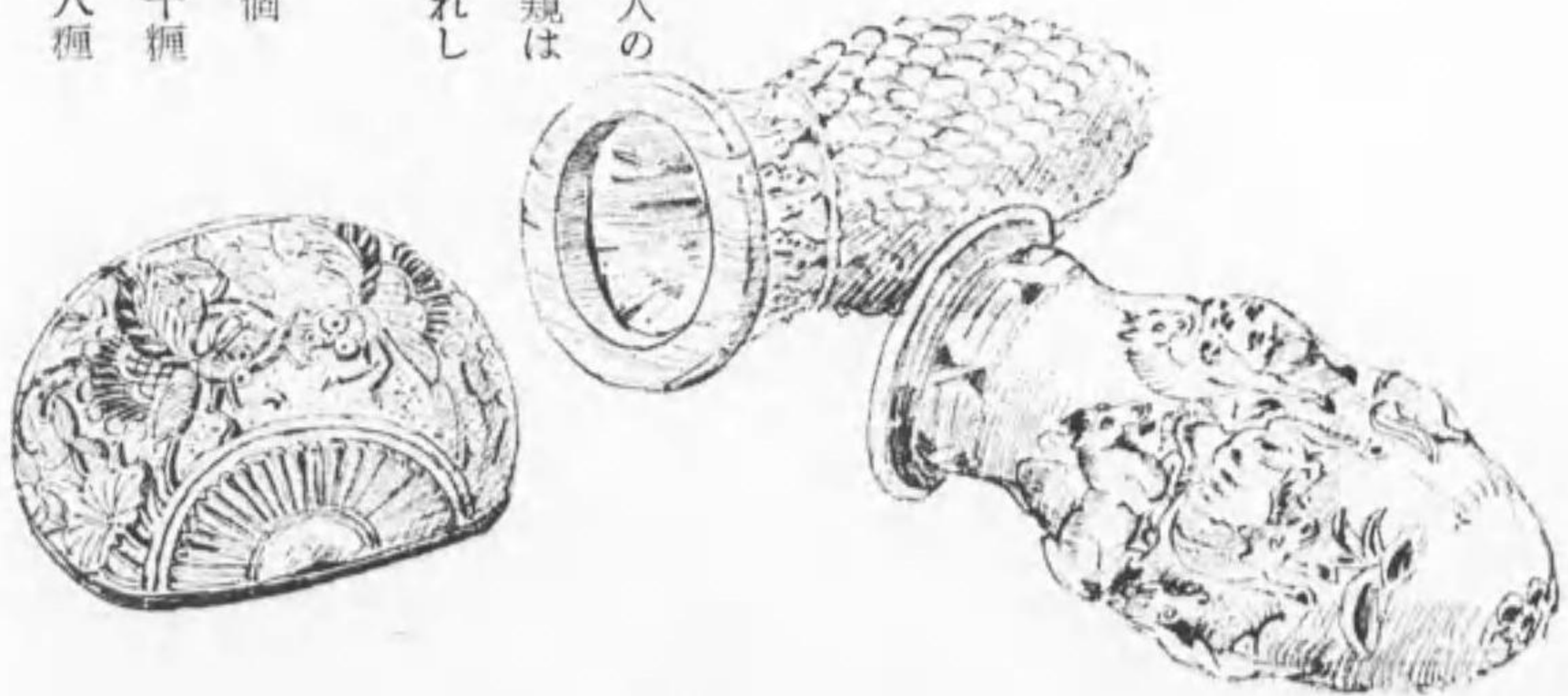
虫籠

支那人は自然を楽しむ民族である。街頭、日當りのいゝ場所を選んでその小鳥と共に時を忘れる翁もあれば、草葉にすだく虫の音に興趣をもち、虫籠をつくつて身邊近く飼育してその鳴聲を楽しむ習慣は身分の上下を問はず。

鬮版上部のものは柳條製で軒、或ひは木の間に掛ける虫籠であり、下部の三個は小形のもので、右の二個は瓜などの未だ熟せざるを牝型に入れて徐々に硬化せしめたもの、群馬の浮出し模様如き、頗る巧みなものだ。左の一個は番の胡蝶と花卉の細かい彫刻である。下部は紅木の板を以て蔽ひ、背面のところに口がある。虫籠といふ小品にも朗ら



かな華人の性情が窺はれてうれしい。  
右ノ二個 高サ十糎  
左 山八糎



漆器について

事物起原に、器に漆を布くことは舜より始まると見えてゐるやうに、支那では極めて古代から漆が知られ、單に器を塗るに止めず、繪もあれば瓦にさへも塗つたほどその用途は普遍的であつた。唐代の製品を見ると孰れも極めて優れたものであり、我が國にも正倉院の御物にその例證を發見するのであるが、兎に角、漆藝は支那が本場でありながら、今日では、それが日本の特技の如く世界的に認められてゐる。事實に於て我が何時の時代でも相當の名作があり、今日に至るも技術的に見て衰退した形跡はない。明代には我が漆藝、

特に蒔繪を學ぶべく杭州人の揚州父子が來朝したことがある。宣徳年間に出來た或る漆藝には金粉蒔繪の年代と署名があり、繪は支那畫風を加味せざる大和繪風の秋草が描かれてゐた。かういふものを見ると、支那の漆工家は技術と共に我が畫風を支那の文化中心に入れたこと、も考へられる。實際支那では漆器としての名作がなく唯徒らに材料を安價に扱つたに過ぎぬ。フランスの路易王朝のコモードには高蒔繪のパノイがあつて、どれも支那の作品と傳へられてゐるが、しかしその大部分は明らかに日本の蒔繪で、中には多少怪しいものもあるが、それは顧客の注文で或る程度の妥協性を加へた爲ではなからうか。



藥盒形蒔繪手箱

蝶番ある上方の蓋をあけ、けんどん式の板を上けると小引出しが九個あつて一寸纏つた形である。小間物行商等に用ひたものであらうか。正面は比翼圖、中央に柳、右には大官の館、舟ありて鳥をのぞむ構圖である。左右の両面は人物山水。背面は梅花圖である。技術的には拙づいがか確かに蒔繪の形式である。本品は清朝末期に作られたもの、漆器の退廢期の作例として價値あるものだ。素地及び蒔繪の技術は其意味でかなり面白いものといふことが出來よう。

高サ 二十三・五厘  
巾 二十六厘

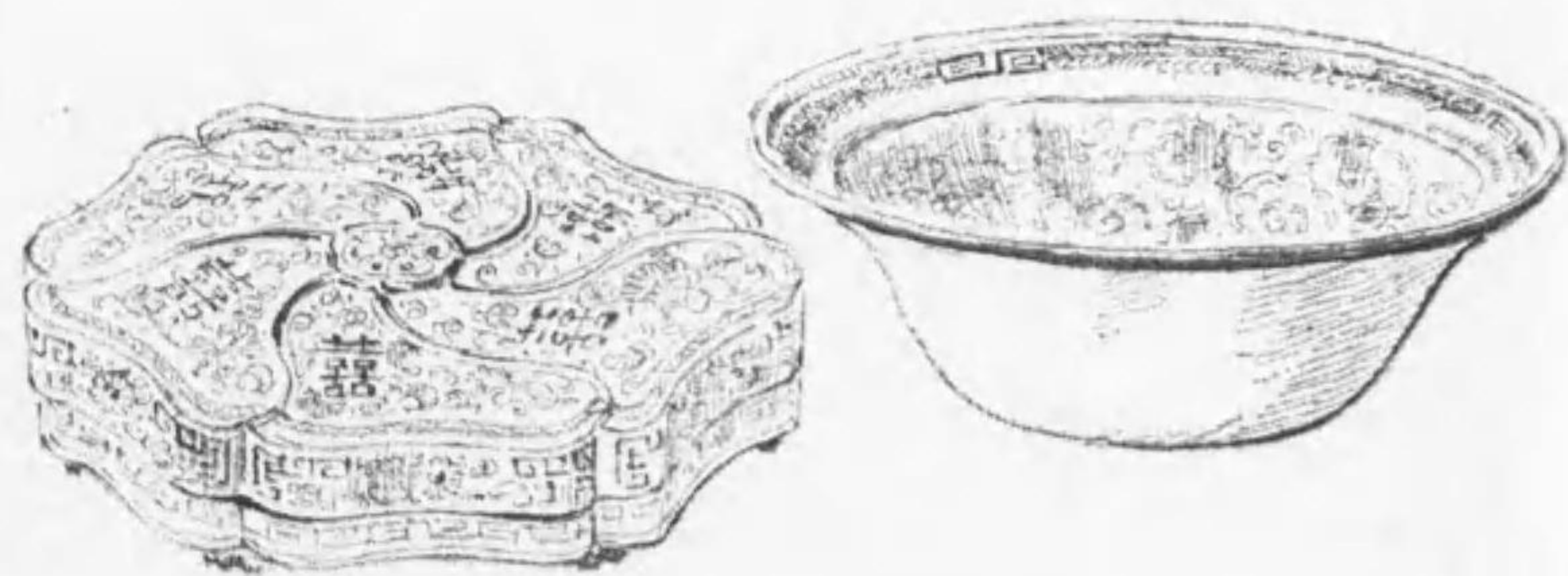


朱塗菓子器と蓋物

左は蓋物、支那人好みの文様が赤地の上にペンキで描かれてゐる。色の調子や文様はかなり面白く見られるけれども、仕事は粗らい。素地は木の薄板で、塗下を相當厚くかつて、六片の花瓣は削り落しにより區劃をつけた。大衆向の器だと思ふ。

右の深皿は木製で漆塗、菓子器の類であらう。左の花形蓋物と同様一般向きの調度であらう。

蓋物 直径 二十八・二厘  
菓子器 〃 三十三厘



漆皮の蓋物二品

桃形蓋物は素地に皮を用ひ厚い下塗の層上に黒漆をかけてその上にくづした壽文字を枝にした桃の模様が描かれてゐる。蒔繪式だが箔置きであつたためにか金色は去り、線描の漆のみが模様を残す。左の箱は同く漆皮仕立て朱漆に花卉、胡蝶と蝙蝠を配してゐる。素地が皮だけに堅牢ではあるが形を調整する上には自由がきかない。多少の變形デフォルメも止むを得ない結果である。

桃形蓋物 直徑 十五匁  
朱漆箱 高サ 九匁

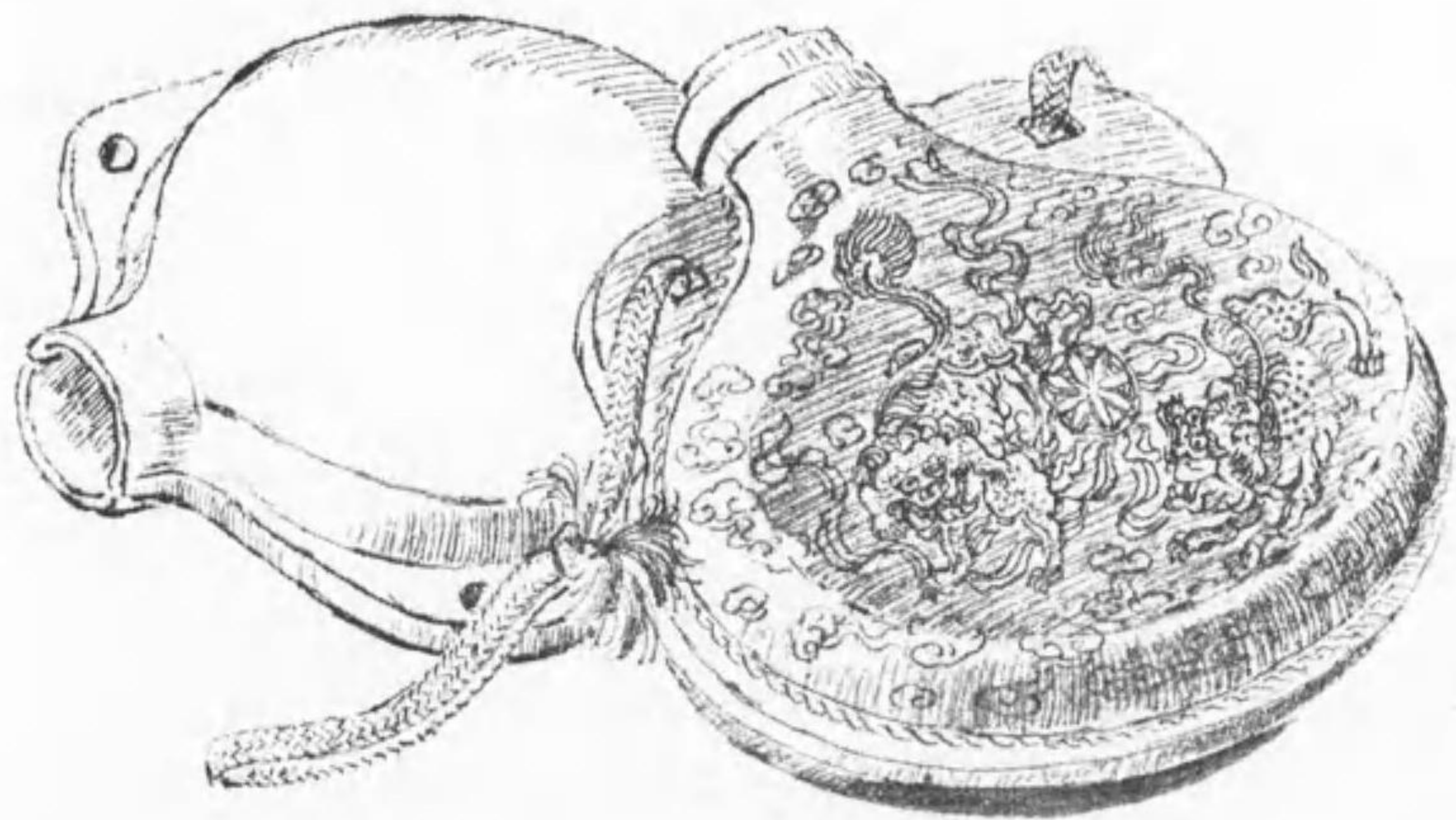


漆皮食盒・中皿と茶托

食盒と中皿は清初乾隆頃の作品であり、食盒の蓋模様として描かれた鳳凰は漆、金箔である。今は落剥して細い線だけが残つてゐる。描線は寔に巧妙ではあるが内部の構造は至つて粗末だ。之に反し、中皿の仕上げは上手のもんだが文様の唐草は食盒と同じ結果に墮ちてゐる。茶托、酒杯受と稱するものも、支那では日用品の一つであり、構造は洵に堅牢である。素地が木か、或ひは輓近アルマイト下地の我國漆器は兎角の缺點をもつてゐるのであるが、漆皮の器には學ぶべきものが多いと思ふ。唯一つ、漆皮のものには塗り下を丁寧にすることが肝要である。あるかなきかの瑕からでも水分が浸透し皮を膨脹せしめて上層を破壊することもあれば、また高度の熱に接近せしめることも避けねばならぬ。

食盒 直徑 三十六匁  
茶托 巾 十三・五匁  
中皿 直徑 十八・五匁





革製帽子入

圖版の右に見える圓筒形の帽子入れは革製である。後方に蝶番が上下二個あり、二段に開くことが出来る。中部のものには底をもたない。全部栗皮色の漆を塗つてゐる。左は帽子とその入れ物で、箱は革製、帽子は頂部に珊瑚色の飾りがあり、材料は麻の上に塗り下

を施し全部箱置、その上に文様を描いて更に溜漆のやうな透明な漆をさつと塗つた程度である。多分大官所用の帽子であらう。

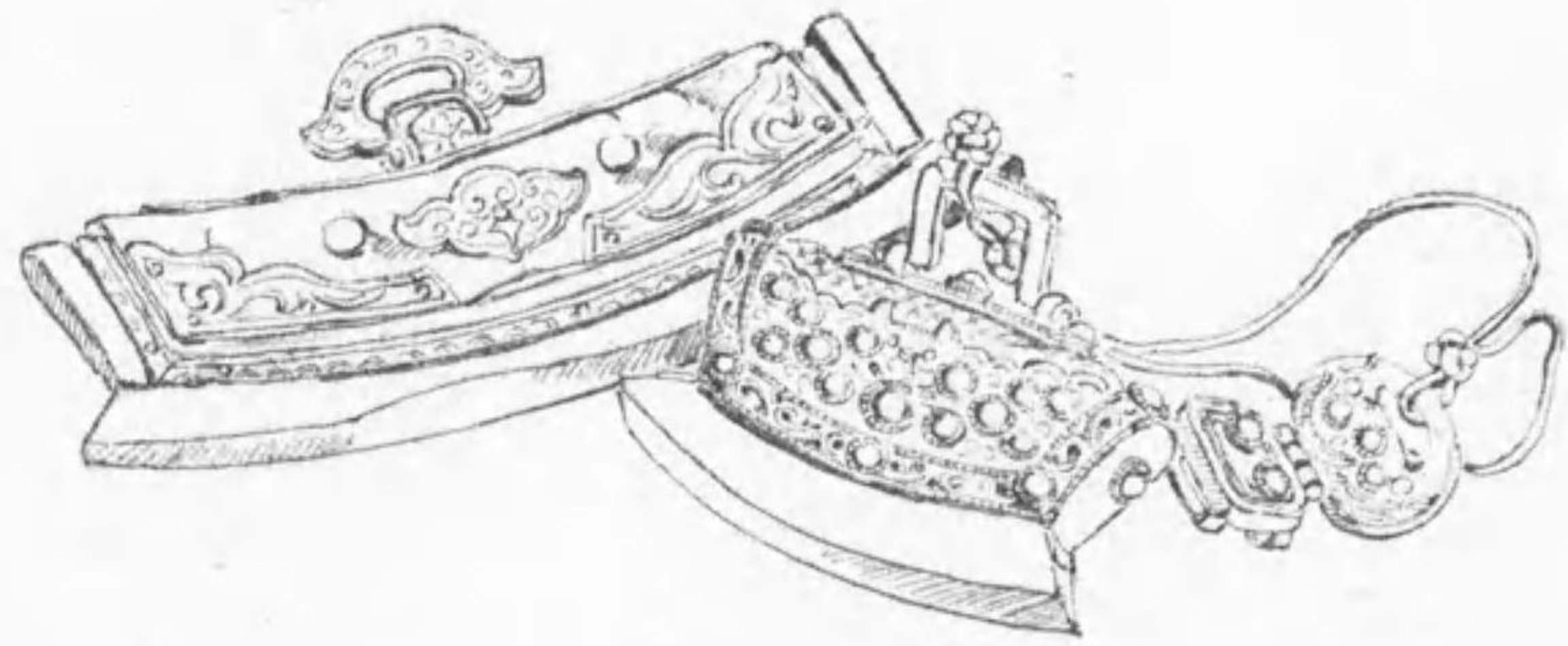
圓筒形帽子入 直徑 三十三・五厘  
先尖ノ帽子入 〃 三十六厘



漆皮彈藥盒

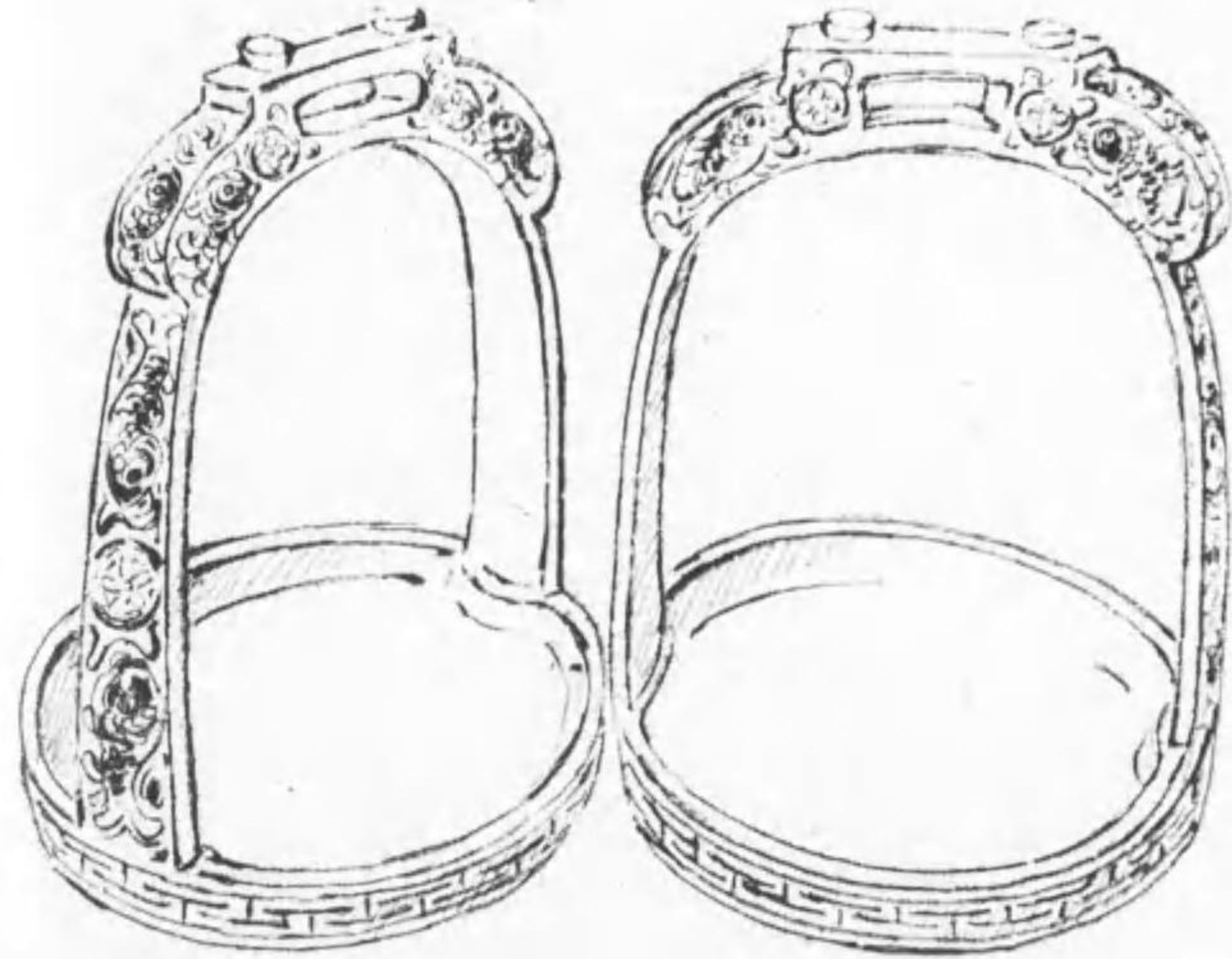
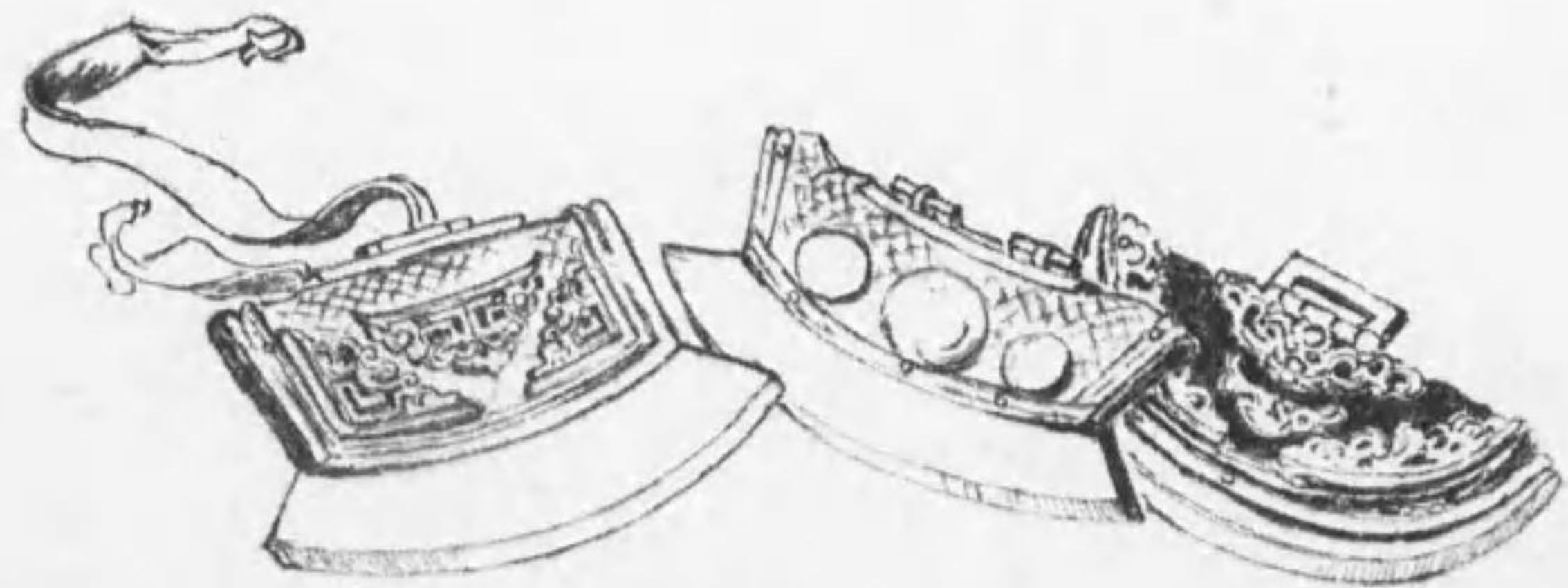
彈藥を入れる器である。徳川時代のものと殆んど形式を等しうしてゐる。しかし我が國の彈藥盒には漆皮のものが割合に少ない。蓋の裏には竹筒があつて彈藥の分量を測定する仕掛だ。武具の附屬品として如何にも質實に出来てゐる。携帯に便するため大抵扁壺式であり、云はゞ水筒に近い形をとつてゐる。蓋あるものゝ文様は一面は鳳龍、一面は玉取り獅子であるが、製作は明末清初であらう。

黒漆龍模様彈藥盒 高サ 十四・五厘  
黒漆彈藥盒 〃 十五厘



火 鎌 子

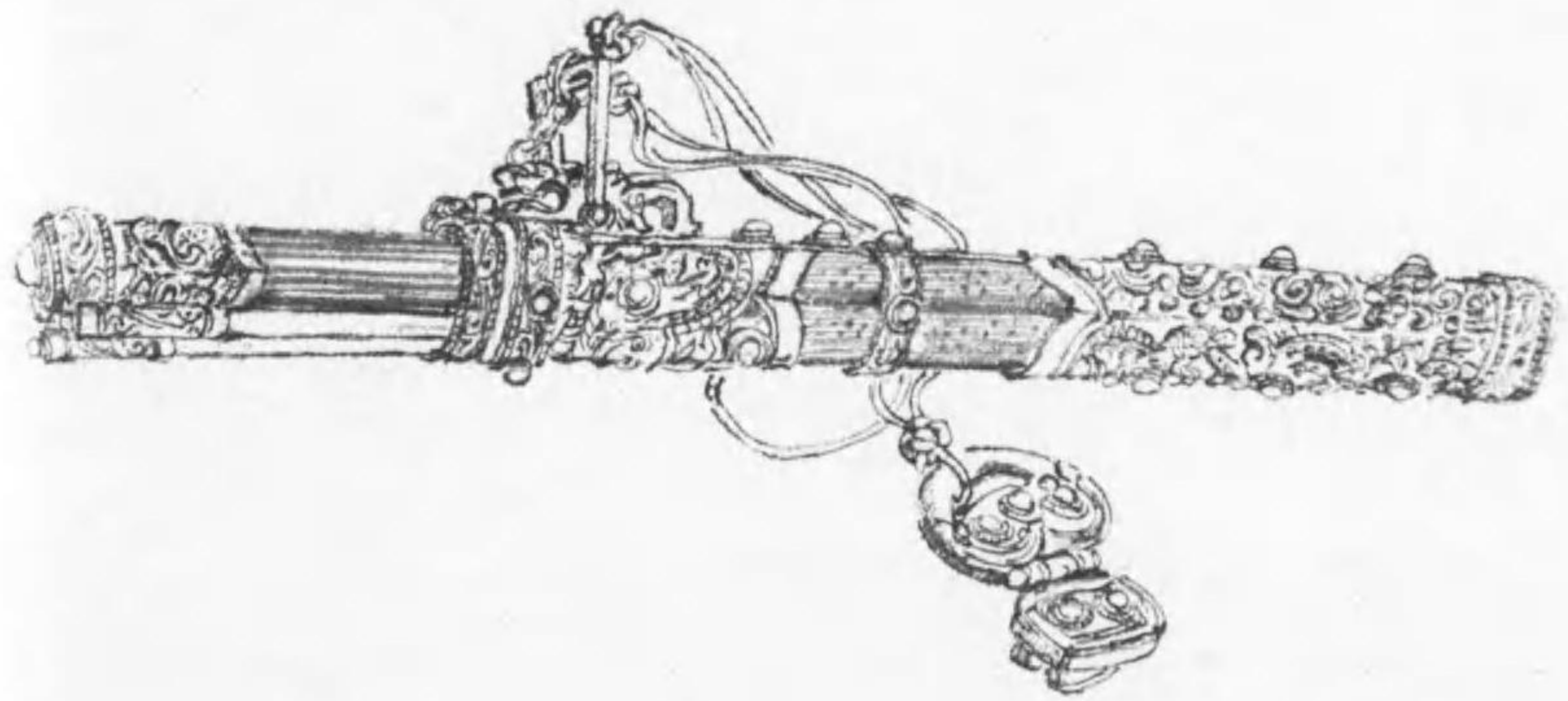
蒙古民族の發火器で、まことに合理的な構成である。燐寸やライターの如きものに較べたならば、原始的な器具のやうに見えるけれども、日本でも明治以前はかゝる發火器を用ひてゐたのである。火を得るにこと缺かない文化人はかうした火鎌子に關心をもたぬであらうけれども、かの曠漠たる原野のさなかにあつて、火を得るにはこの火鎌子がなければならぬ。又濕氣を恐れぬ點からいつても燐寸以上である。打金の所は鐵、裝飾には蒙古銀即ち白銅眞鍮等を用ひてゐる。革袋の中には蓬と燧石とを納める。袋の部分は纖維性の糸をもつて縫はず悉く錠どめとなつてゐる。火打石は支那語で火鎌子ホウリエンズといふ。大形なものは打金の直徑が十五厘ほどもあり、小形のものに至つては五厘ほどのものもある。



鐙

蒙古貴人用の鐙。金屬は蒙古人の愛好する蒙古銀と稱する白銅である。七寶の文様は玉取り獅子の構成の如き、花紋を中央にした向ひあへる獅子である。泥七寶の調子、色の扱ひ方には稍漢人と異つた趣味を窺ふことが出来る。鐙の踏み座が凹んで、一見灰皿の如き感を與へるけれども鐙としての條件はかゝる形式を必要とする。用途が鐙だけに手確かな構造であるが、蒙古傳統の形であらう。

蒙古刀子



蒙古人は遊牧の民であるだけに身の廻りのものを大切に  
し、細かなものでも凝る習慣があり、漢人獨逸人などは其  
處に目をつけて、彼等の趣味に合ふやうなものを賣り込ん  
でゐる。本品の如きは先づ上物の方で蒙古珍刀としては代  
表的なものであらう。蒙古人はその生活上刀子を携帯する  
必要があり、なかには茶器、匙、小刀、箸等、所謂食事用  
七ツ道具を納めた大形なものもあるが、普通は小刀、箸、  
爪楊枝など三四種で、食事に必要なもの總べては一本の鞘  
の中に納められてゐる。刀子の柄や鞘は多く金屬、珊瑚、  
土耳其石、馬腦などを鏤め、まことに豪華なものだが、素  
材には銀を欣ぶ。けれども蒙古銀と稱する白銅製が多い。  
鮫皮、七寶、金屬の透し彫などの高級品も見受ける。概し  
て刀の刃は甘い。よく鍛へてないからであらう。朝鮮など  
にも類品があるが一種の裝飾品となつてしまつた。飾りの  
文様は多分に漢人のモチーフを取り入れてはゐるが、細部  
にはスキタイ、西藏或ひは波斯、ビサンチノ・ササン文  
様の隠見さるゝものさへある。

長 サ 二十九釐

硝子作品二種

梅と牡丹の花様あるこの壺は乾隆硝子  
を想像するやうな技術である。白地の肌  
厚く緑色硝子をかけ、文様のみを残して地  
肌まで削り落す、玉細工に堪能な華人の仕  
事としては驚くにはあたらぬけれども、恐  
らくは相當の時間を要することであらう。  
乾隆硝子のやうに上手なものではないが支  
那現代工藝の一作例と見ることは出來やう



コバルト色の蓋物は白地の上に青硝子をかけ面取りに切つたもので、技巧的には平凡を  
免れないが、いろいろの意味で無價値とはいへない。

コバルト小壺 高サ 九釐 花樣壺 高サ 二十釐

## 七 寶

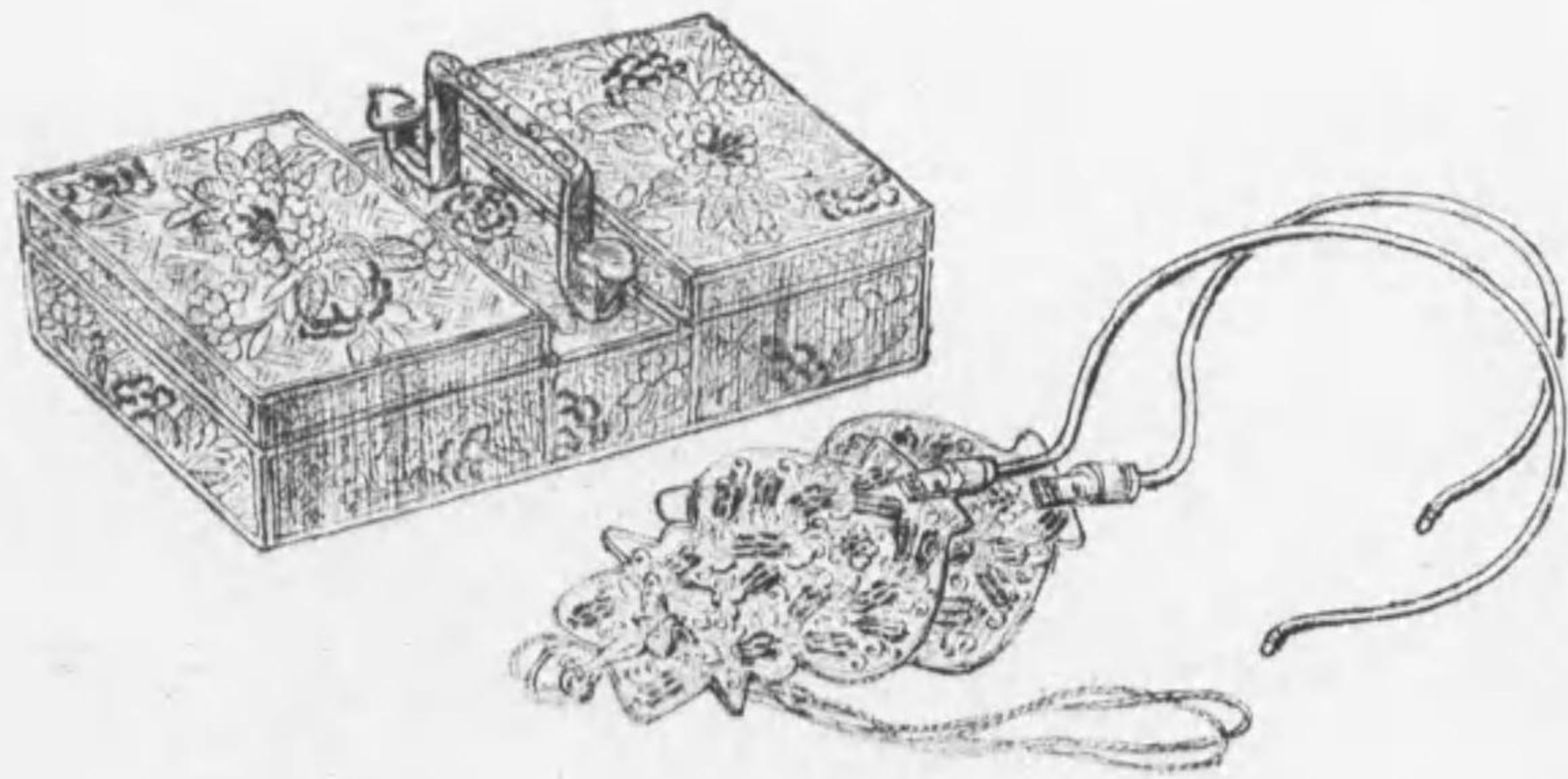
七寶とは我が工人が命名した言葉であつて、銅器又は陶器の面に瑛瑯を用ひて文様を焼き出したもの。金銀や銅、眞鍮などの細き針金を用ひて文様に輪郭をつけたものと、針金なしのものがある。フランス語のクルワゾネ *Croisants* といふ言葉は寔によく七寶の意味を傳へてゐる。即ちクルワゾネとは障壁又は仕切りしたものの意味で、金屬の線によつて仕切り、瑛瑯を填充して焼き上げるといふ意味がある。瑛瑯には透明

性、不透明の二種類がある。支那七寶の大部分は所謂泥七寶と稱するもので、窯から出した時、當然現はれるところの面の凹凸を磨き落すために尙ほ不透明になり勝ちである。支那の七寶は素地が銅で、仕切りも同じ材料であるが仕上げに渡金を施してゐるので或は眞鍮臺のやうに見える。支那では七寶が大衆化すると同時に技術的には低下した。

## 七寶・卷葉入と肉掛

卷葉入は全部が七寶で、地には雷文、花模様の裝飾である。大量的生産品であるから技術的には優れたものではないが、しかし煙草入としては稍大袈裟なものゝうちにいれてよからう。把手の兩側には二個の蝶番付き箱があり、目方も相當なものだから把手には充分の注意が拂はれてゐる。構造からいへば、一寸手提金庫のやうな形式だが、そこに支那人らしいものが見られるのではなからうか。肉掛は飾り全面に瑛瑯をかけず、唯文様の糸瓜の實葉と花だけに限つたことは珍しい技法であり、我が國では行はれてゐないものゝ一つである。本品の如き、肉掛といへば厨房用具に過ぎないものだが、さうしたものにさへ七寶の飾りを施すといふことは吾等の考へ及ばぬところである。卷葉入も肉掛も臺が眞鍮のやうに見えるけれども、銅に渡金したもので、肉掛は確かに金の渡金の痕跡を示してゐる。

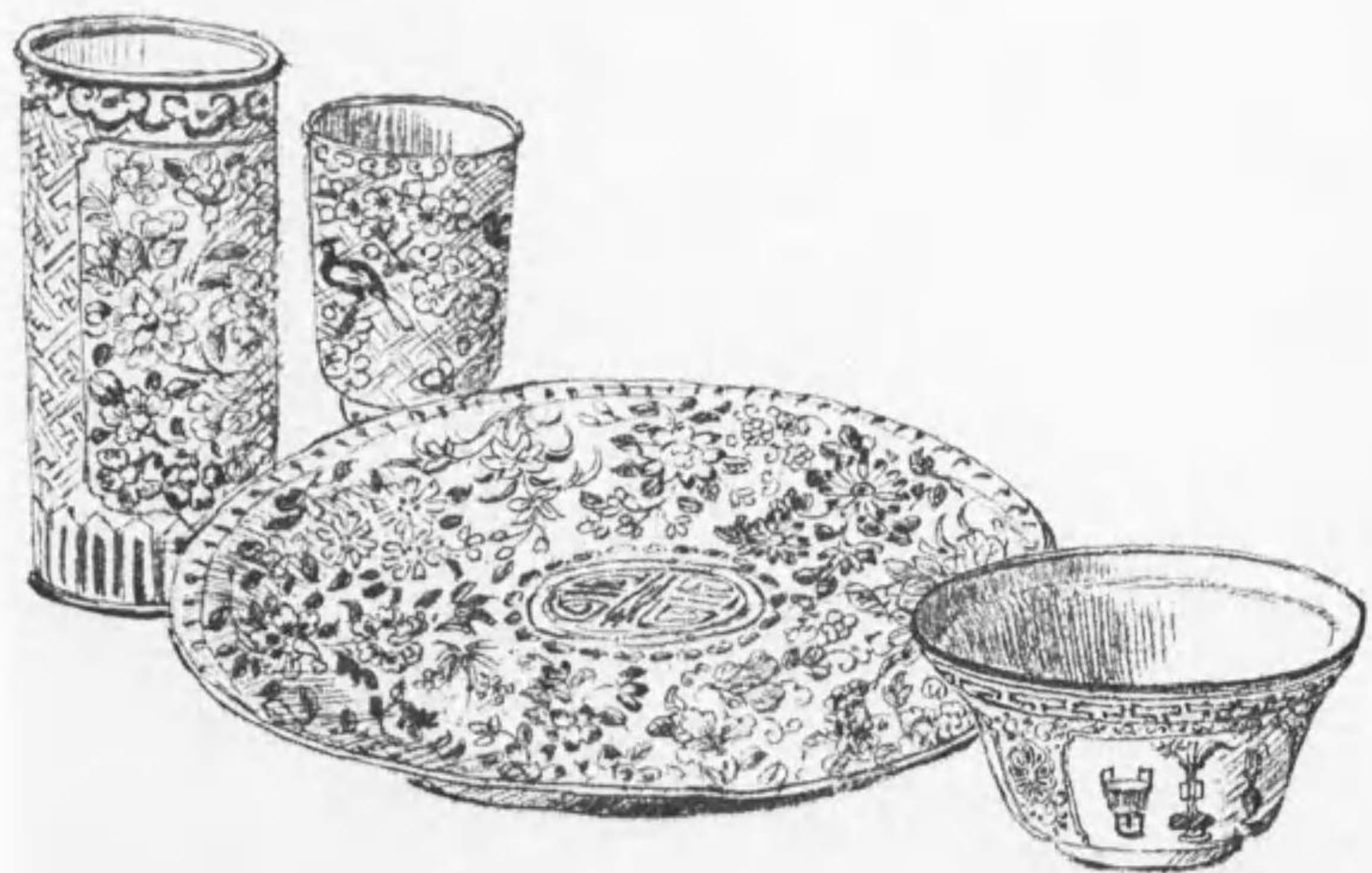
卷葉入 巾 二十・五種  
肉掛飾り 長サ 十 種



### 七寶とエナメルの工藝

圖版の左方は筆筒と湯呑。素地は銅、クル  
 ワゾネは眞鍮、泥七寶にて花鳥を現はせる清  
 朝末期の製作である。右の皿と碗とは素地が  
 銅、瑠璃焼付である。新工藝の参考としてよ  
 ろしい。日本の七寶は技術的に一歩前進してはゐるが、支  
 那人が七寶を大まかに扱つてゐるところも學ぶべきではな  
 からうか。精巧な日本七寶が一部の歐米人の歡心を迎へる  
 には充分であつても、支那人のやうに安易にこの材料を驅  
 使することも必要だ。

- 眞鍮七寶筆筒 高さ 十一・五寸
- 七寶湯呑 〃 八・八寸
- 銅臺瑠璃丸盆 直径 二十六寸
- 瑠璃極彩色繪付碗 〃 十一・八寸



### 照 明 器

華人は生活の中心を屋内にく爲、室内照明器の構  
 造や裝飾には頗る凝る習慣があり、之に反して街燈を  
 用ひることは比較的稀だ。又我が國の神社佛閣の燈籠  
 に類せるものもなく、歐米風に設備した新しい公園は  
 別として支那庭園の夜は暗い。屋内の照明器は材料も  
 多方面に亘り意匠にも亦苦心してゐるのである。我が  
 國の岐阜提灯の如き形式のもの、角、菱、木框の絹張り  
 の紗燈や、牛角燈のやうにその透明性を生かしたもの

があるかと思へば、淺草觀音で見るとやうな大提灯、用  
 途々々によつて形式を異にしてゐる。其の他蠟燭立、  
 佛具の燭臺、カンテラなど種類は至つて多いけれども  
 大抵は大同小異である。都會の地には電燈がある。華  
 人好みの笠やスタンドのないのは、電燈を用ひるやう  
 な華人には歐米風のものが多いのであらう。電燈とい  
 ふ照明器は未だ充分華人の生活にはいり切つてゐない  
 故もあらう。



紗 燈

裝飾用の照明器で、大量に生産されるのだが細かい彫刻を施した枠の部分も一見精巧ではあるが、唯部分的素材を組み合はしたものに過ぎない。これに繪を描いた紗を張り照明器としての實用性は鮮ないけれども如何にも支那人の室内裝飾には相應しいものである。大小各種あり、加工に便利な軟質木材を用ひてゐるから堅牢といふ譯にはゆかぬ。

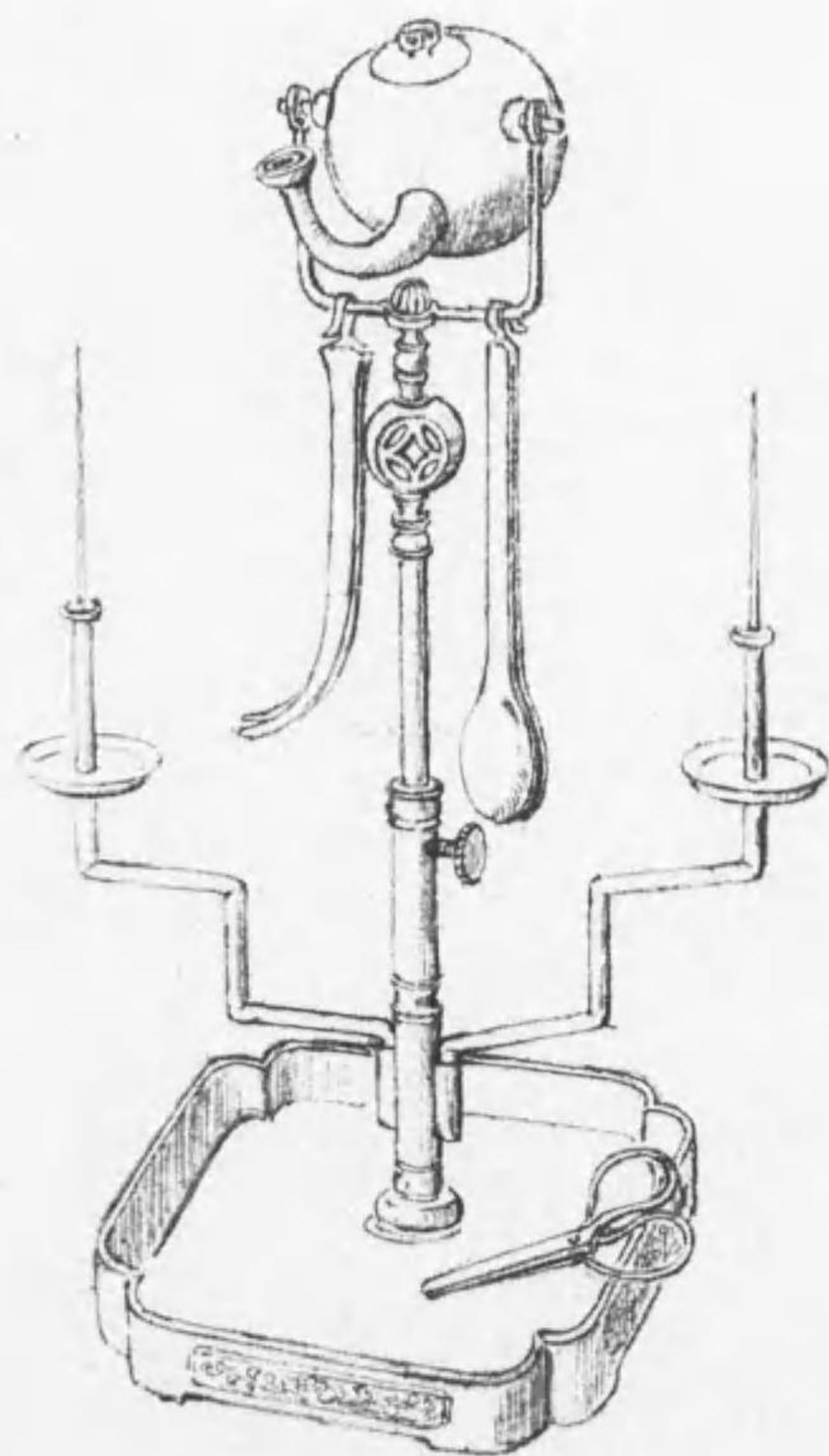
右 高サ 十七 櫃

左 〃 二十二 櫃

カンテラ燭臺

總べてに眞鍮を用ひてゐる。左右には蠟燭、中央はカンテラ、螺旋により光を上下

することの出来る構造である。カンテラの油槽は右左の軸によつて力の均整を保ち油を火口に送るに便じてゐる。附屬品三品。全體の構成はまことに合理的で、取り解しも亦



自由である。直線、曲線の交叉に一種の美觀を添へたことは支那の器具としては珍らしいものゝ一つであらう。

高サ 三十八 櫃



牛角燈

牛角燈とは牛角は伸ばして提灯としたもので、華人ならでは出来ない

仕事である。牛角には婦人子供などの風俗、上下には唐草を描く。畫技の點では巧みといへぬけれども、用途を考へ透明な顔料を選んだ。繪具



にまでもその用意の行き届いてあることは感心だ。蠟燭の光りが牛角の模様を通して輝い

た時には一種の美しさをもつことだと思ふ。

高サ 二十八・五厘

蛇皮タンバランと拍板

共に寄席或ひは宴席に於て舞踊と共に用ひられる樂器である。前者は八角、片側に蛇皮を張り、側面には八個の鈴がある。歌曲と舞踊の調子に連れて鼓面を打てば鼓と鈴の同時に音が出る構造である。明るい調子を出す樂器で、歐洲、特に西班牙、佛蘭西などで行はれてゐるタンバランと形式を同じうしてゐる。構造は更に精巧であり、用材も遙かに優れてゐる。拍板は稍我國の四ツ竹に類し、單に調子を調へるに役立つ。音そのものは音樂的ではないが、西班牙のカスタニエツトと同様な音律的效果を與へる。

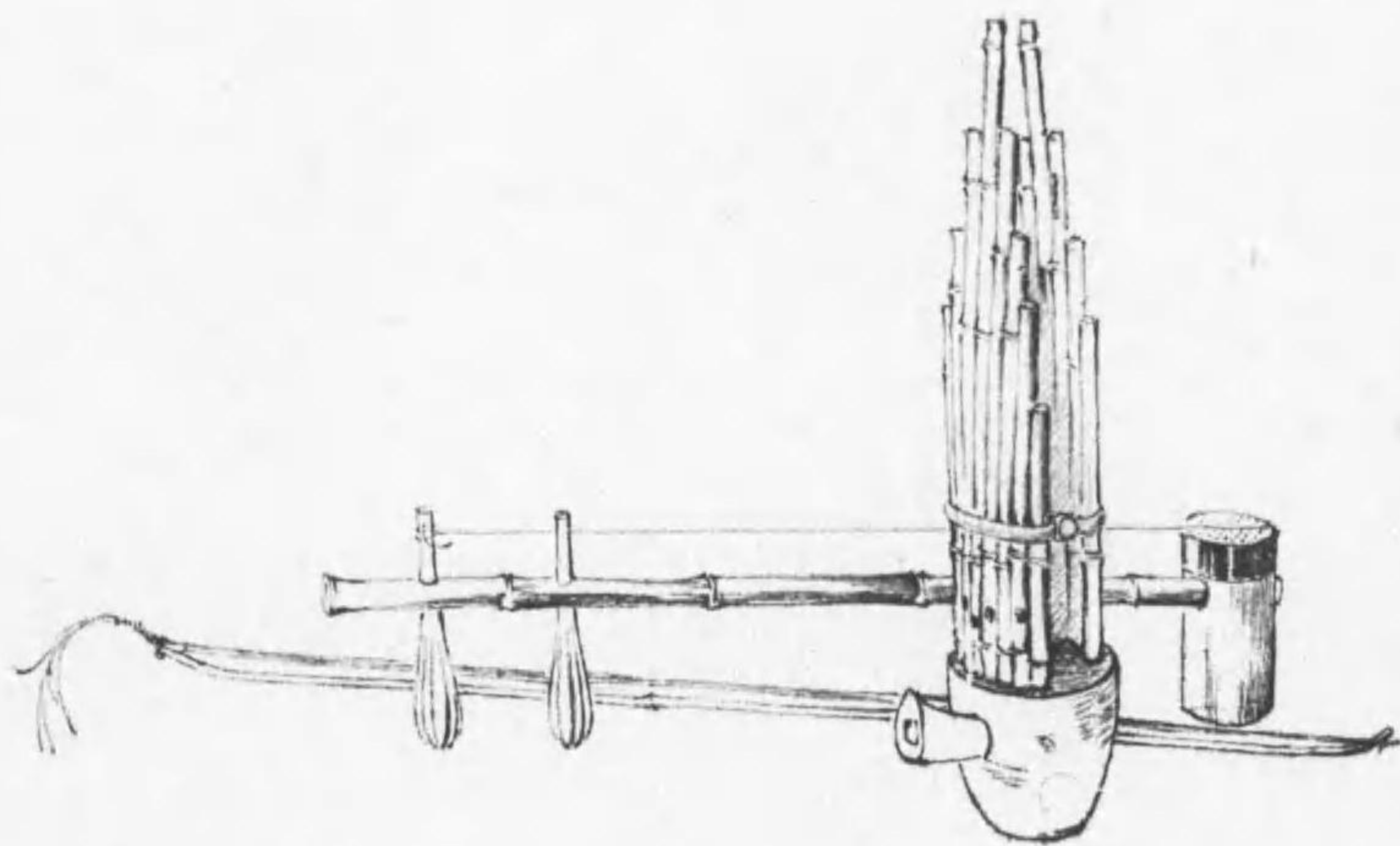
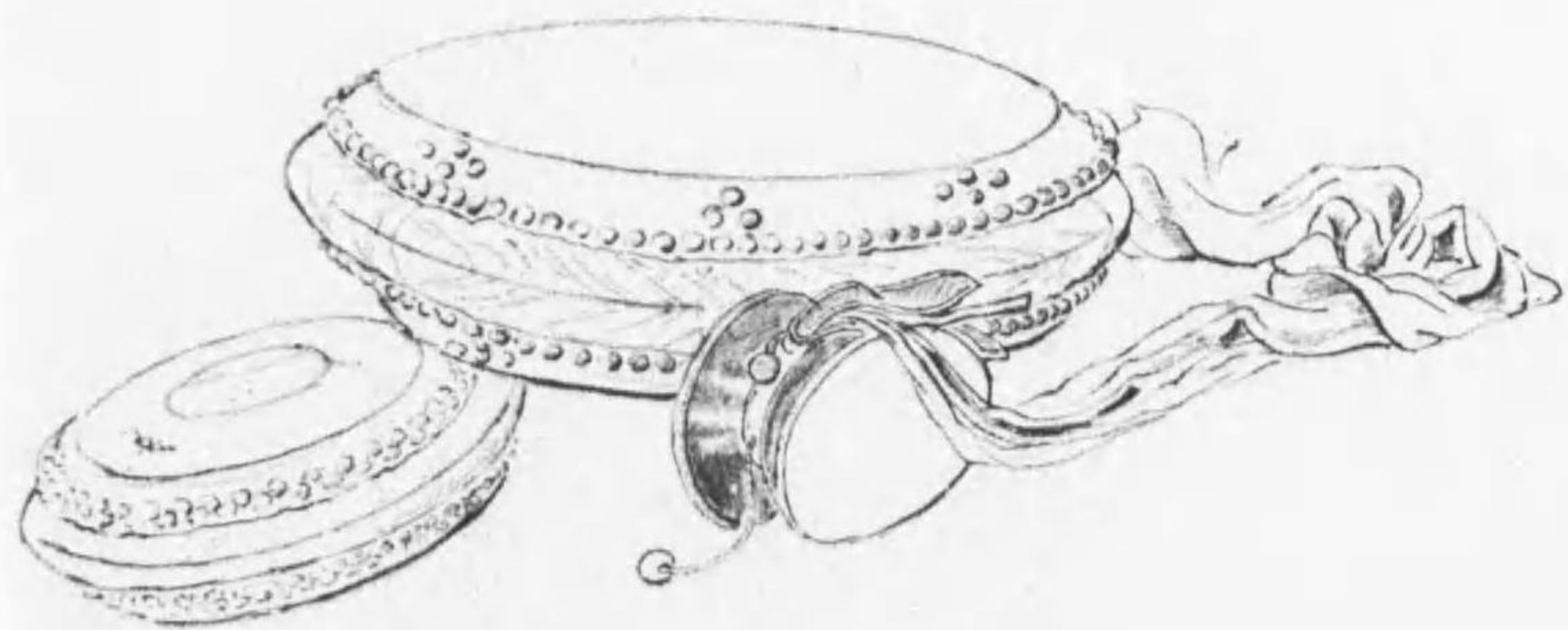
タンバラン 直徑 十五厘  
拍板 長サ 十五厘



太鼓

大形の太鼓は華人常用のもの、圖版の左、下の小太鼓は歌舞用である。右下の大太鼓は蒙古の喇嘛僧が教義用具として備へるものである。本品の胴は木材であるが、本格的には人間の頭蓋頂骨二個を用ひることになつてゐる。両面を張れる革は人皮である。胴の接合部には二本の紐があり、その端には木の打玉をつけてゐる。讀經をしながら取手代りの裂を握つて豆太鼓のやうに打ち振るとその音は、丁度法華の太鼓に近い。大きな太鼓は日本の豆太鼓の如く、小太鼓は小鼓のやうに鋭い。

- 喇嘛太鼓 直徑 十 糎
- 大太鼓 " 二十五糎
- 小太鼓 " 二十糎



笙・胡弓

笙は大體、我が國でも古代から用ひてゐた形と同じであつて、上方笛の部分は竹、下部は眞鍮、毛彫で草花文を彫つてゐる。金屬の接合には盤陀を用ひてゐるが技術はあまり巧妙とはいへぬ。本品は古い作ではないが、唯かゝる樂器が千數百年の長い年月の間用ひられてゐたといふことに興味がもてる。

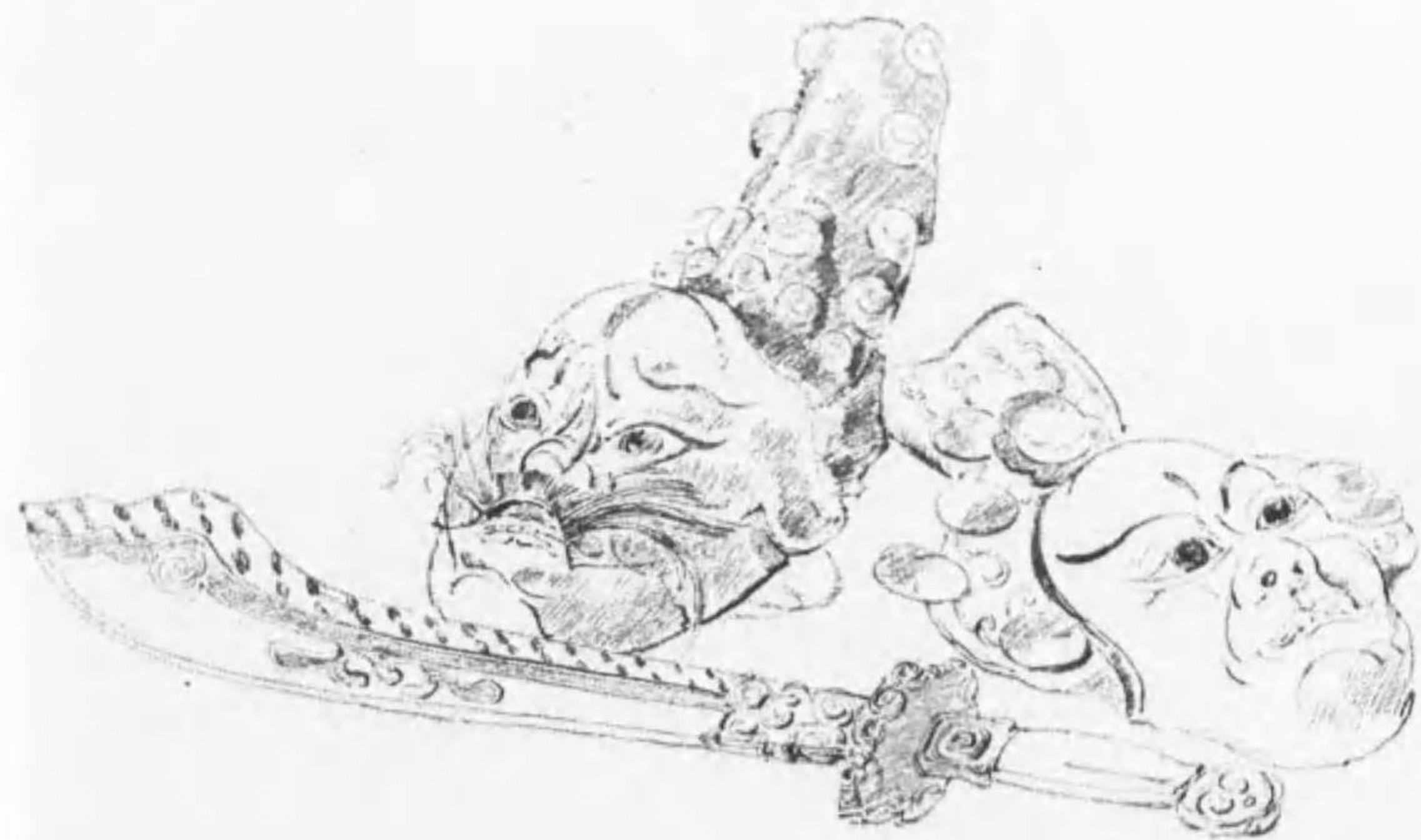
胡弓の用材は竹、蛇皮を張つてゐる。糸は二本で弓もヴァイオリンと同じ組織であるが、大衆用の樂器だけに構造は如何にも粗末である。

- 笙 高サ 四十五糎
- 胡弓 長サ 五十糎

### 劇假面と青龍刀

劇の假面は實用上からあまり重みのかゝらぬ材料を  
使うことは、洋の東西を通じて同様であり、紙は最も  
それに適した材料の一つであらう。劇と假面は一つの  
の、やうであつた古代の希臘では、織物に塗料を施し  
た下地であつた。これ等の假面は一定の形式により、  
型抜き彩色であるから恐らく登場人物（ペルソナ）  
の感じは出てゐることと思ふ。しかし、支那獨特の隈  
取りは動かすことの出来ないものであらうけれども、  
原色の着色はどうかと思ふ。肉着けの點からいへば我  
が能面などと比較すべき性質のものではないが、支那  
の假面はあまりにも寫實にかつて實感が伴ひすぎると  
いふ感じがする。

圖版に見える青龍刀は大形の玩具である。子供用のおもちゃにさへ、その飾りの細部に古い傳統の生んだ美しいものが隠見され、長い歴史を物語つてゐると思ふ。



### 赤帽人形と猿人形老虎

庶民階級の玩具であつて、孰れも縫ぐるみの仕立である。猿人形は門猴兒と稱してゐる。赤帽人形や猿人形の上繪はかなり達者であり、布老虎は地色が黄色で上繪は赤黒緑である。縫ぐるみだけに比較的永くもつ譯だが、服飾にまで民族的趣味を示してゐることは面白い。いづれも北京製屋臺店の商品である。



靴

支那人は古来より靴を穿つてゐるが、農民は實用上から皮革製の靴を用ひる。一般には纖維質の材料で作  
り、底の一部に革を用ひたものがある。清朝の婦人は  
纏足といふ習慣があつた爲に、その時代に生れた婦人  
のなかには小兒の足よりも小さいものがある。圖版の  
左に掲げるものは纏足用の靴であり、嬰兒用の兎や金  
魚の靴よりも遙かに小形だ。或ひは舟底の靴、刺子模  
様の男子向穿き物を加へて見たが、今日でこそ支那靴  
の種類は僅かなものだが、佛都バリーのクリュニー美  
術館の支那靴は數百足以上の多きに及び形式に異種多  
様なものがあつた。

- 婦人纏足靴 太サ 十一 櫃
- 兎面嬰兒靴 " 九・五 櫃
- 金魚 " " 十一・五 櫃
- 舟型靴 " " 十七 櫃
- 男子用半長靴 " " 二十五 櫃



團扇

團扇は時代と國とを通じて存在する器であるが、要  
をもつ扇のみは支那人の創案である。圖版に示した團  
扇は孰れも北支地方の所産ではなく、中南支の出來だ  
と思ふ。左の團扇は熱帯、亞熱帶地方に繁茂する棕櫚  
葉であり、羽團扇は厨房用に蠅などを逐ふによろしい。  
右の團扇は竹幹の外皮を巧みに剥ぎ取り、ベニヤにし  
た極めて精巧なものである。彫刻した文様には顔料を  
さし、部分的にも凝つた技術を施してゐる。飾り團扇  
としては先づ上乘なものといへよう。

- 棕櫚葉製團扇 長サ 三十五 櫃
- 羽根 " " 四十 櫃
- 竹幹 " " 四十二 櫃



花鳥文刺繡

刺繡は支那に於ける特技の一つで刻糸と共に古代から發達した技術である。繪といふ文字によつても刺繡の起原は極めて古代にあつたことが解る。繡の技術は材料により名稱を異にしてゐるが、縫ひつづしに刺したのを錯繡（さごらぬひ）といつてゐる。この掛布は生地には紅がら木綿を用ひ、絹の平糸によつて花鳥文を刺し、粗い木綿の生地が文様を一層絢爛たらしめてゐる。胡蝶の花紋を中央に置き、鳳凰、蝙蝠、花紋散點で佛蘭西刺繡のやうに色糸の効果を擧げてゐる。寢臺の蔽ひといつた用途をもつものであらう。

長サ 二米二十種  
巾 一米八十五種

花鳥文毛氈

コバルト色の毛氈に鎖縫ひで花鳥文を大膽に布置したもので、相對的構圖である。本品のやうに均整的な構圖は動もすれば硬い感じを與へるものだが巧みに之を避けてをり、文様の布置から見れば支那人の創作構圖ではない、恐らくは中央亞細亞ボハラ地方の影響を受けたものと思ふ。

長サ 一米七十五種 巾 一米二十種



## 支那の染織

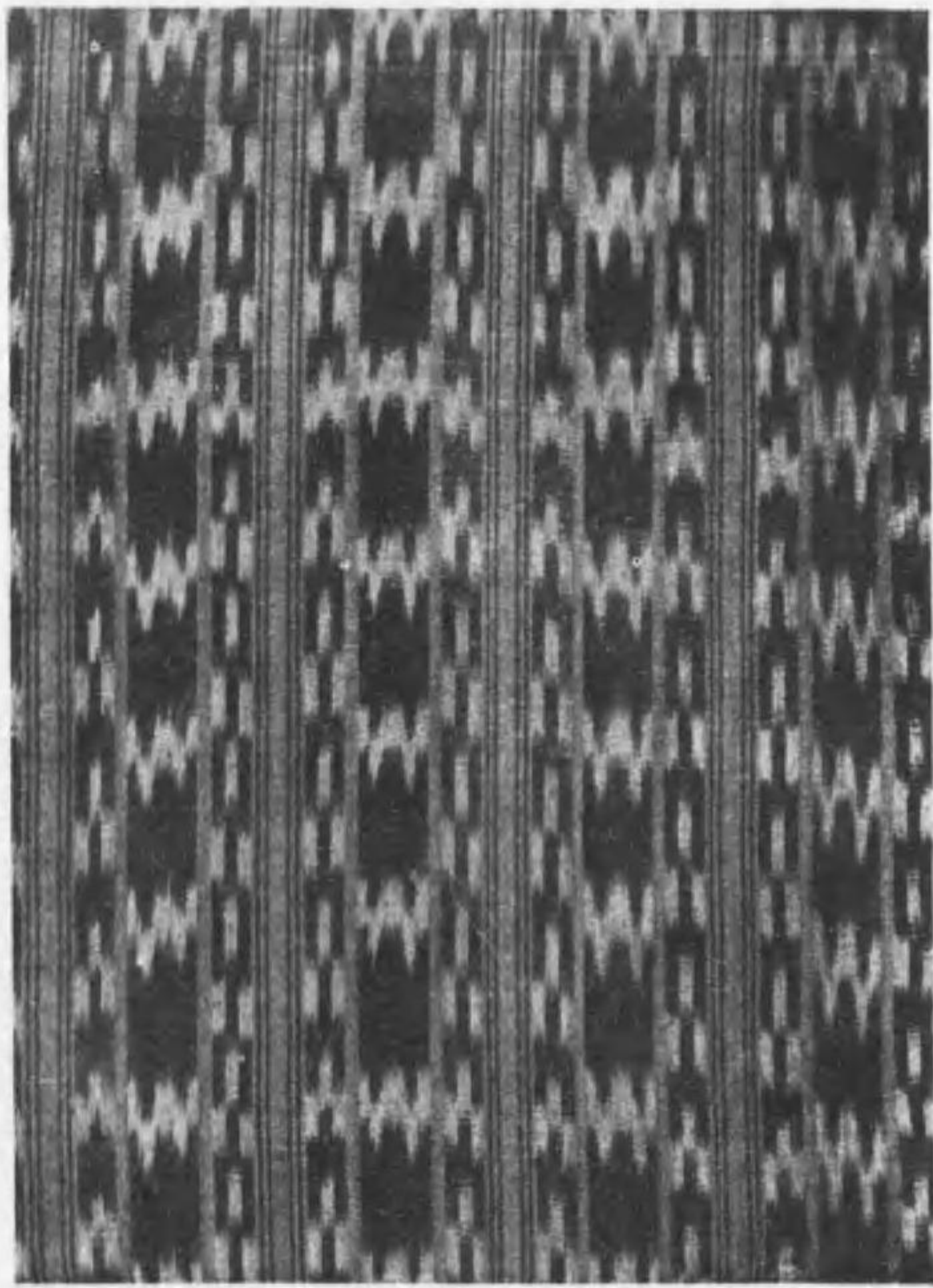
支那現代の染織と稱するものをみると、その大部分は輸入品であつて、華人獨特のものとしては至つて稀だ。しかし、地方の農民が衾として染めた印花粗布の如きは、文様といひ染の工程といひ、原始的だが本格的なものである。冴えた藍地の白い小花散點は支那民藝の一つとして優れたものだ。南方地方で行はれる文様の表現は北方と反對である。印花粗布の文様は型紙により、防染にパテを用ひるところから泥染といふ。パテは大豆粉と石灰とを四分六にませた一珍風の糊で

ある。これを印花麵と稱す。織では山繭絹子の絹紬がよい。色系を地の黄色に配した、ざんぐりとしたものに却つて華人の仕事らしいものがある。綿物には支那本土出來のものが尠く西藏、新疆省などを經由した西域地方の産品を坊間に發見する程度で印度やビルマの間道風に経緯共、縞り糸の交叉によつて織り上げたものである。西藏で出來る華紋の絞り染は毛氈と毛織とに普通であるが配色は一定して異色あるものは鮮い。染の色は臙脂、紺、黄、緑で経綯になつてゐるものもある。

## 絣

縞子仕立の絣織で縹縹文様だ。經糸には木綿、緯糸には絹を使つてゐるが、調子は黄、鐵、臙脂で色止めは完全とはいへぬ。この織は支那のものではなく、西域地方から輸入されたものであらう。西藏經由、中央亞細亞系の織である。経緯の木綿糸は絹の緯糸に比して太く、手觸りは粗い感じを興へる。本品に類した紺白矢飛白の織もあるが、前者と同じ系統に加ふべきものであらう。織は稍粗く、紺地の白の矢飛白を織り出したもの。材料は麻で一種の民藝品としてとることが出來やう。

長サ 一米九十釐  
巾 八十六釐





太原織綿絨布

太原産の粗布、綿絨布である。木綿の白地に藍模様の映りはよく、巨匠の手になつたかと思へるほど傑出した圖案である。文様としては禽獸、花卉等を意匠とするが、どれも巧みな構圖で、色は簡單なものだが文様の効果をあげてゐる。本品は片脚にて立つ夜の鶴を現はす。月あり、蛾を描いて空間を説き、鉢には花、下部には僅かに土坡を描いて大地を象とる。鶴に安定感を與ふべく片脚には特に力を入れてゐる。意匠に選擇があり孰れにも巧みな便化が行き届いてゐる。

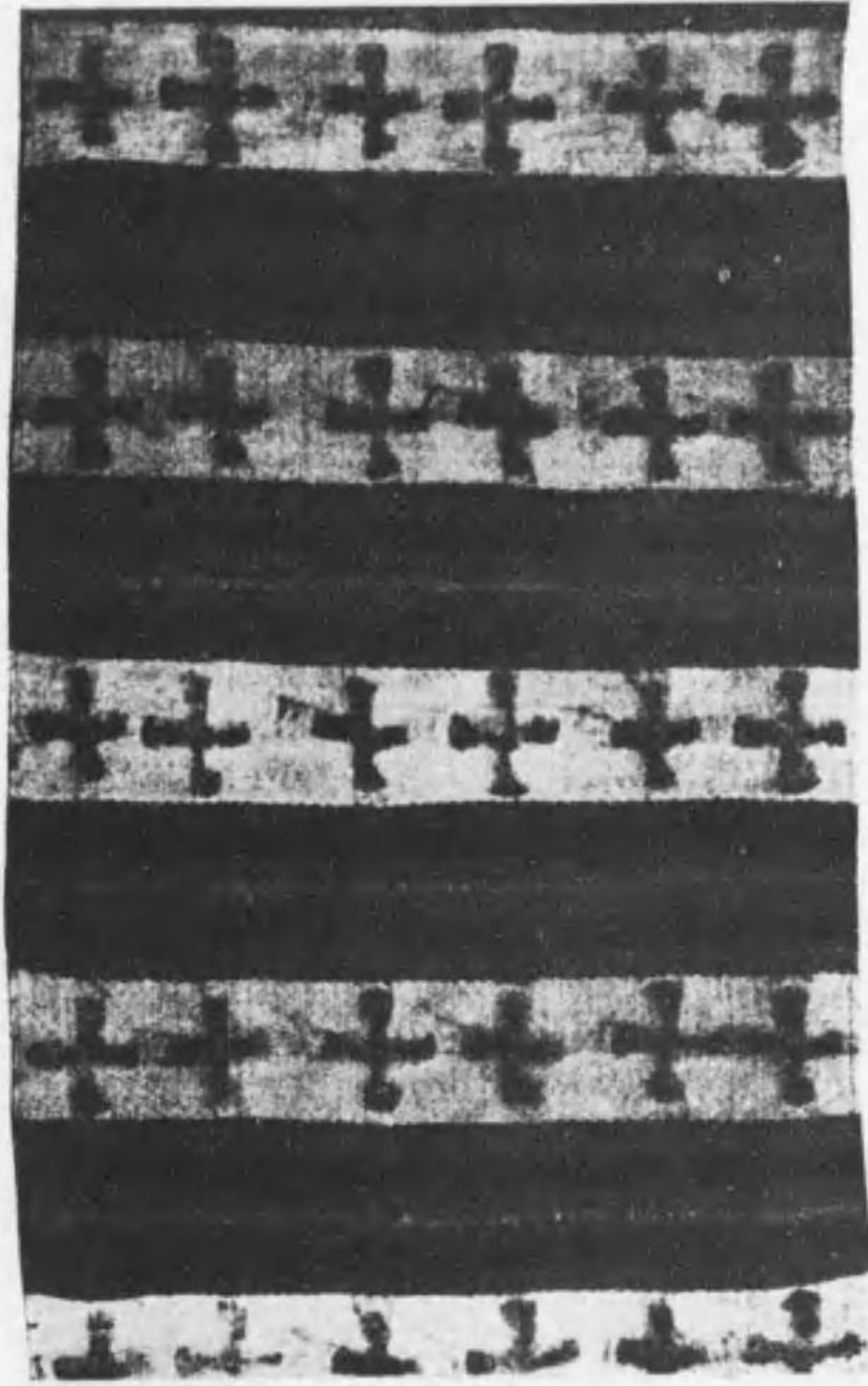
長サ 一米四十四寸

巾 四十五寸

西藏十字文毛織

一般には蒙古織と云はれてゐるが、喇嘛教の關係から西藏とは聯絡があり、従つて西藏染色が蒙古織と誤り傳へられるのである。經緯糸共に羊毛で紺と臙脂を練糊風に織り込み、地色には黄白の色系を相互に用ひてゐる。絞りの十字文も同じく紺と臙脂であり黄白の地とのうつりはよろしい。絞りは縞に比して餘りに冴えない技術であるが、しかしかうした絞りが却つてうぶな感じを興へるものである。京都の祇園祭りなどで人の目につく町家の掛布は大形毛氈、虎の目絞りの西藏染めだ。圖版の毛布の織巾は二十三寸ほどで、巾の廣いものを要す場合には適宜に接ぎ合はすことになつてゐる。いづれも動植物染料により、發色は極めて鮮やかであり、しかも落ちついた調子を失つてをらぬ。

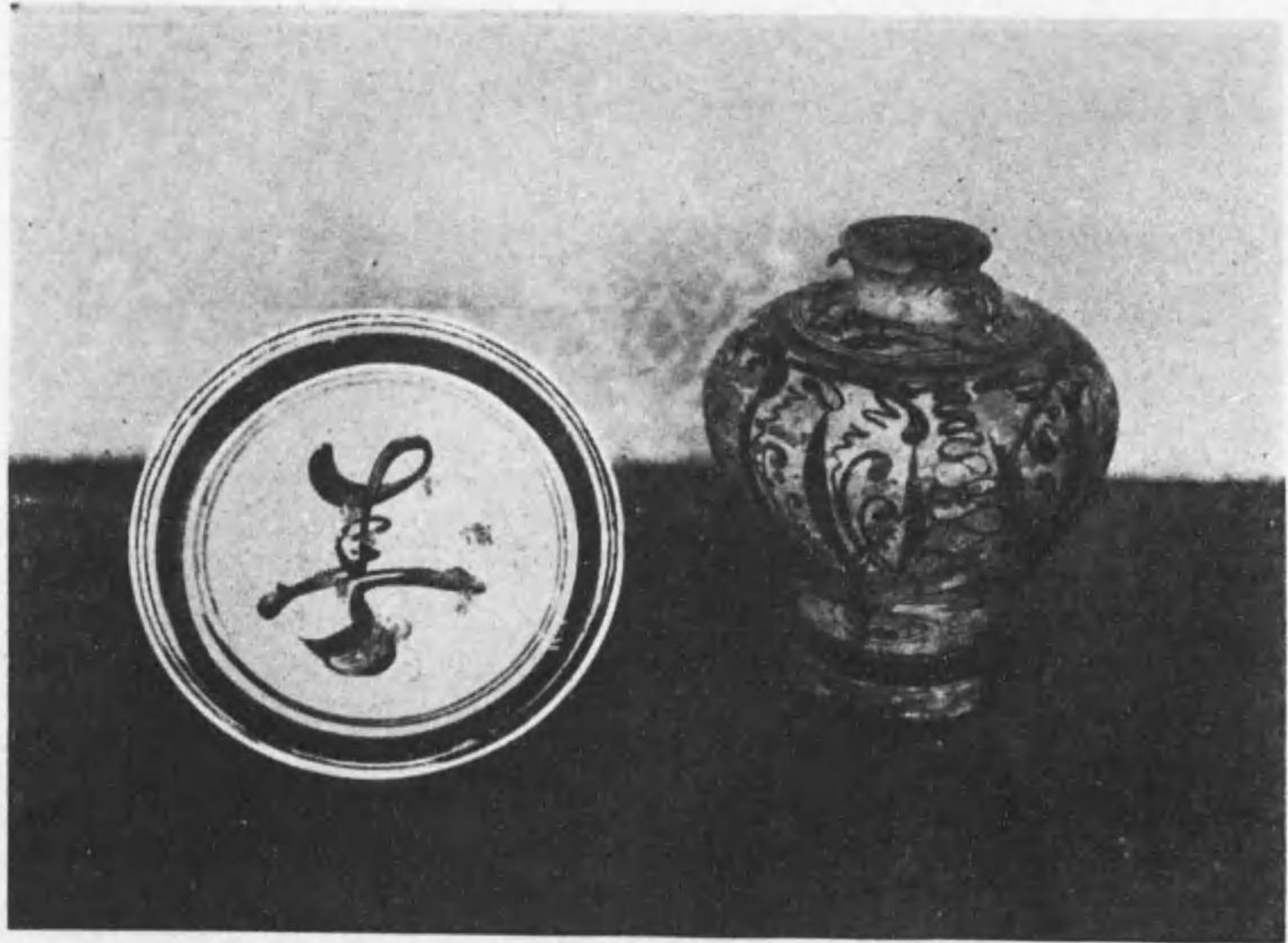
長サ 一米三十寸 巾 四十六寸



絨 毯

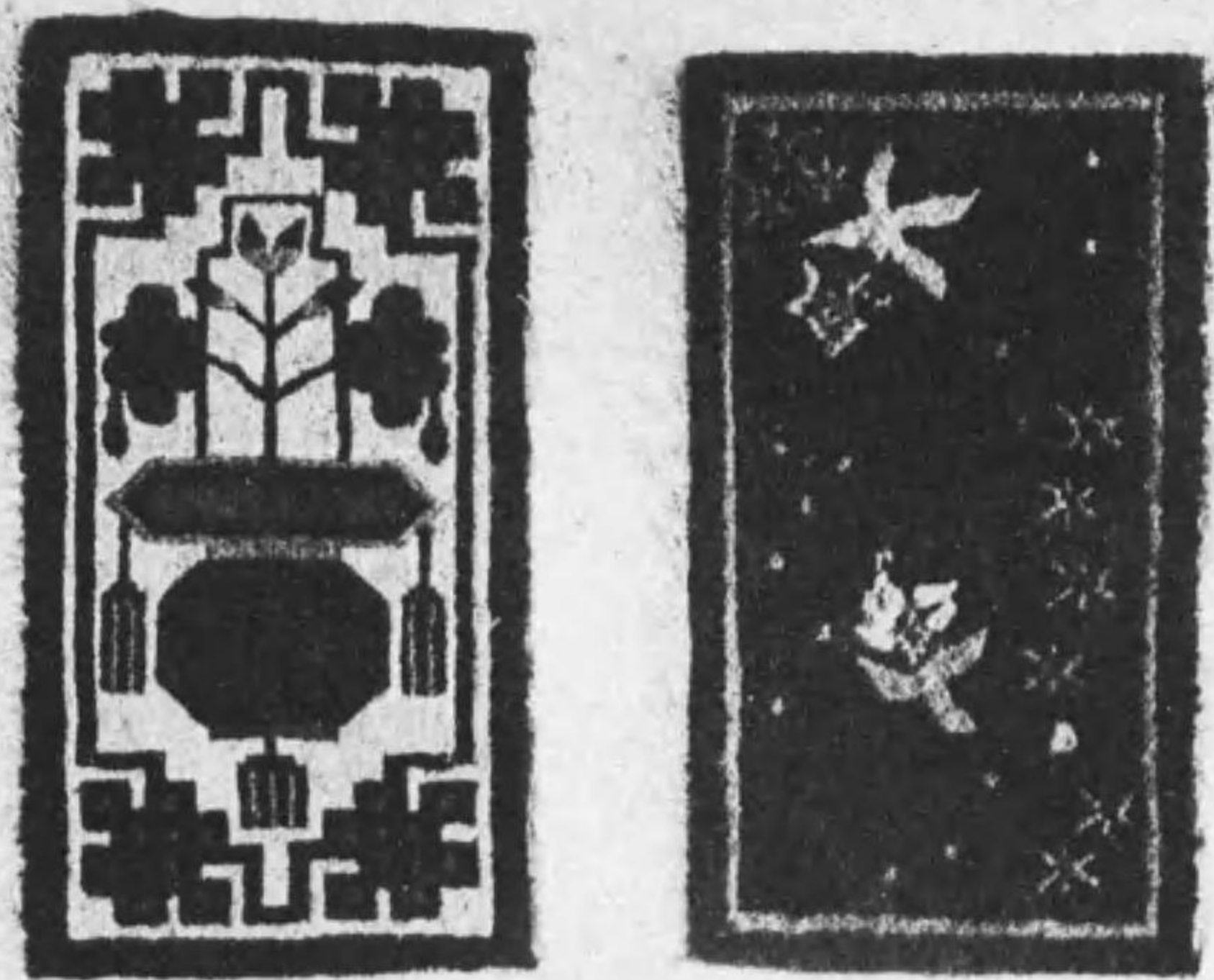
絨毯とは織毛の起つた敷物の總稱であつて、佛蘭西語ではタペー Tapis といひ綴織をタピ・スリー Tapisserie といつてゐるが、語原は拉甸語の Tapes 即ち織毛の起つた織物といふ言葉から出来たもので毛の起らないものは絨毯とはいはぬ。支那絨毯といつても大抵は北支に製造が限られてをり、天津絨毯の名は世界的であるが、多くは北京製である。輸出品として文様の注文をうけたものは別であるが、圖柄は普通、龍、鳳、卍、花卉などである。明の萬曆などと稱して市價の高きを呼んでゐるものもあるが、其等は何れも毛脚が短く染は植物染料に限られて、褪色したものはなく、古い波斯製品に近い品格をもつ。清初の康熙乾隆などのものになると、豪華絢爛にして金銀糸を打ち込んだものなどあるが、毛脚は現代ものゝやうに長い。絨毯は元來毛脚の短いものを優等品とするが、天津絨毯はその毛脚が特に長く染が化学染料であるから、色に深みをもたない。毛脚が比較的短かく色文様の冴えたものは寧夏絨毯である。支那絨毯の起原は技法系統からいつて勿論西域地方であらねばならぬ。

右 長サ 六十 幅 三十三  
 巾 六十八 幅 三十三



北支の民窯

支那では北支方面だけでも相當知名の窯があり名品をつくつてゐるが、民窯と雖も陶土と技術の類似から製品の感じがそれ等に接近してゐるため、雑器のやうな民窯でも或程度、北支に於ける陶瓷工藝の知識を得ることになる。例へば磁州のクリムがかつた白地の上に鐵釉を以て達者に描いた繪高麗とも云ふべき民窯品は宋窯の名品を聯想し、山東省博山窯の製品にして、自由に呉須を驅使したものに明の佳品を憶ふべく、或ひは柿釉を掛けた井など、恰も天目の感じを興へるであらう。北京郊外で作らるゝ唐三彩風のもの是一般人には本物のやうに見え、黄釉の上に緑釉が流れた器に時代の錯をつけたら、どうして本物の三彩と區別し得るか。河南省の李河で出来る厚手小鉢、釉の垂れ味のよさ、下手物とすればこそ下手にも見えやう、金粉を蒔いたこの器が柘桐の箱から出たとしたなら、大道露店、一山幾何のものとは思へぬ筈だ。山西省介休窯と太原産の黑窯品に





雅趣豊かなものあり、同じく黒釉で左官の道具といはれる灰水  
 罐など面白く、開封で出来る唐三彩形式のものにも又愛すべき  
 製品がある。圖版に示せる壺と皿は磁州彭城鎮の出来であり、  
 クリーム色の白掛地、鐵釉で達者に繪付けてをり一寸繪高麗の  
 感じである。次の圖も支那現代の民窯であり、或物は古代の名  
 品を聯想するほどの品格をもつてゐる。而もそれ等の價格とい  
 へば事實とは思へぬほど低廉である。鯉様様の皿は山東省博山  
 窯で白掛地に藍繪、直徑は約二十六・五厘の中皿である。その  
 左の鉢も同じく博山窯、右は唐山窯の中鉢である。

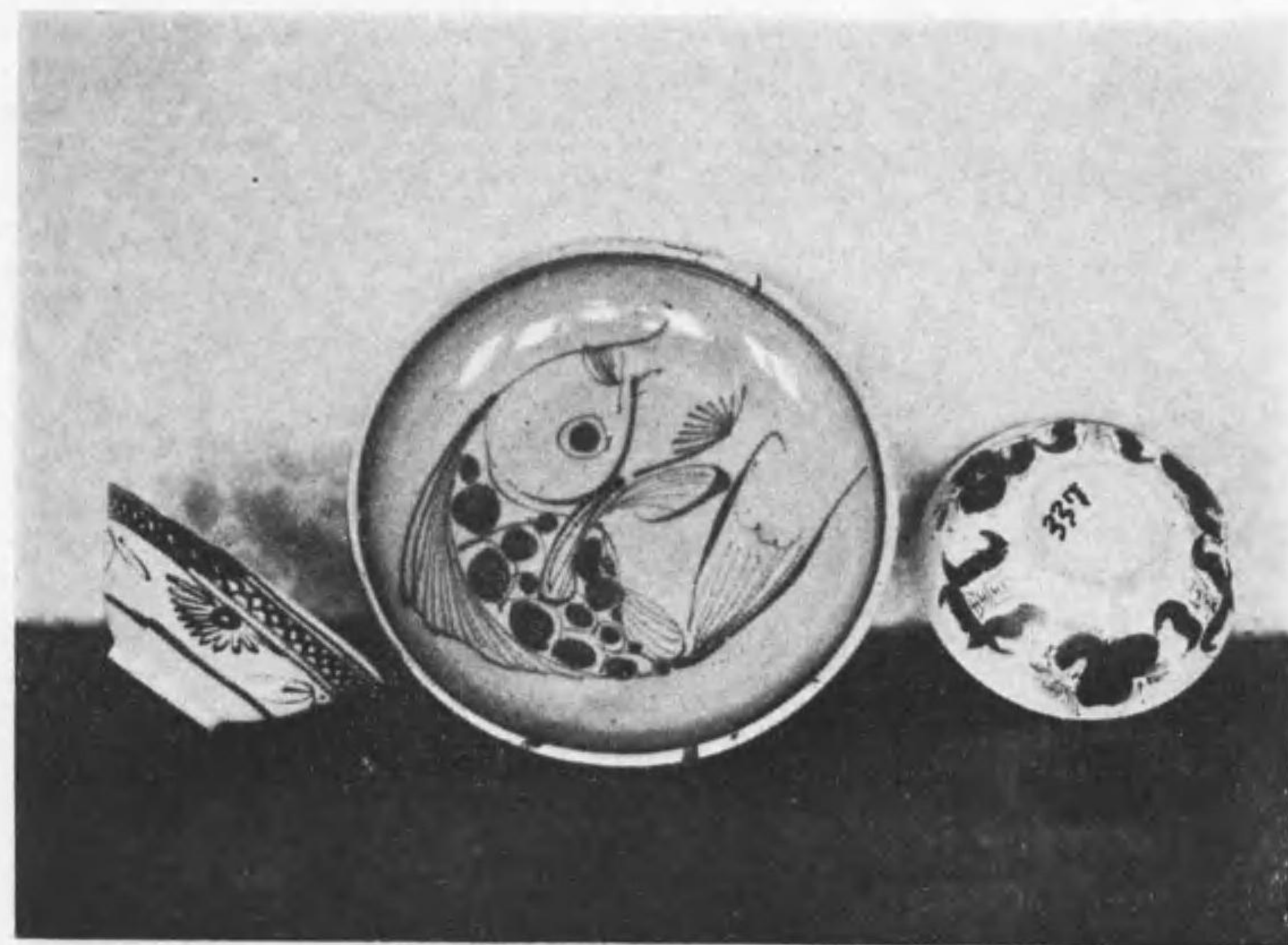
壺 高サ 二十厘  
 磁州皿 直徑 二十厘  
 博山中鉢 直徑 十六・五厘  
 唐山 〃 〃 十六厘  
 博山中皿 〃 二十六・五厘

### 雜器としての

#### 椅子と小橙子

北支庶民用の椅子や小橙子（腰掛）の材料には柳が  
 多い。之等の椅子は南支方面で造られる竹材のものを  
 柳に更へたのであつて、倚り掛りを除けば我國の竹の  
 縁臺に類する構造である。用具も充分でなく、いはゞ  
 手作りの椅子に近く、要所要所は鋸止めとなつてゐ  
 る。構造に至つて粗末であるが、しかし其處に却つて  
 簡素な美しさがあるのではなからうか。歐洲家具の様  
 式からすこしも影響を受けない、華人獨創の椅子であ  
 り、實用を中心としたところに價值をもつのである。  
 腰掛も亦一種の味はひをもち、街路のほとり、これ等  
 に掛けて食事でもとる華人を見ると、形の上から小橙  
 子はなくてはならぬものゝやうに思へる。

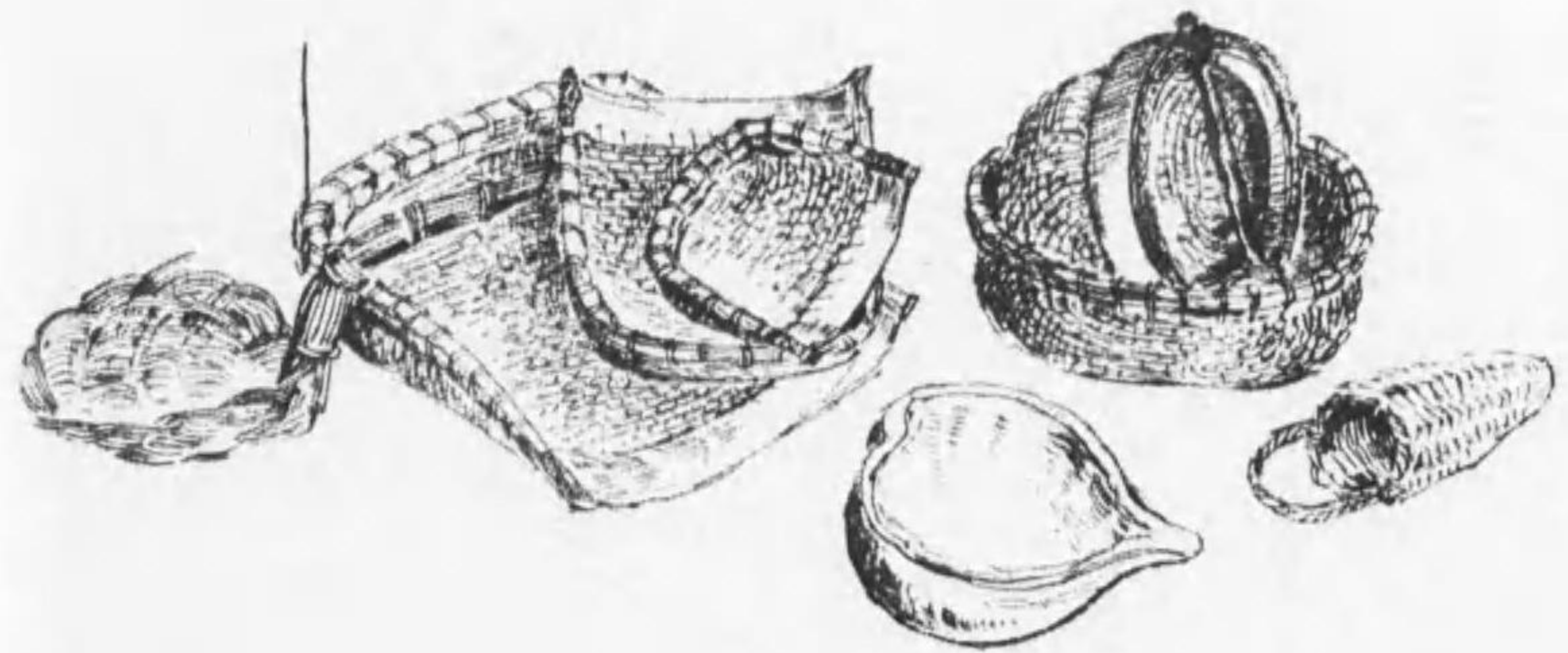
椅子右 高サ 七十厘  
 〃 左 〃 六十八厘  
 小橙子 〃 各二十厘



箕・掛籠其の他

柳條製の箕はその取口に柳の薄板を添へて塵埃を掃き入れるに便す。三方の縁も亦柳枝で尖端を革で包んでゐる。單に殻類を擇り分け或ひは掃除に用ひる道具に過ぎないけれども素材を合理的に使つてゐること、長き使用に堪へる構造といふ點も見落してはならぬ。丈夫といふことが日用の器具には第一の條件である。

- 箕 巾 大 四十五匁
- 〃 中 三十五匁
- 〃 小 二十五匁
- 掛籠 高サ 二十五匁
- 揚杓 長サ 四十八匁
- 水杓子 〃 三十匁



油簾・鹽菜簾

油簾は柳條を編んで作り内部と外部の上方には豚の薄皮を貼り、これに塗料を施したものであるが、油類を運搬するには至便なものだ。同じ構造で小形なものには漬物簾即ち鹽菜簾がある。旅行用の扁壺も亦同じ素材で液體の容器として用ひる。これにも亦豚の皮と塗料を施してゐる。遠の鶏冠壺に類する水筒である。

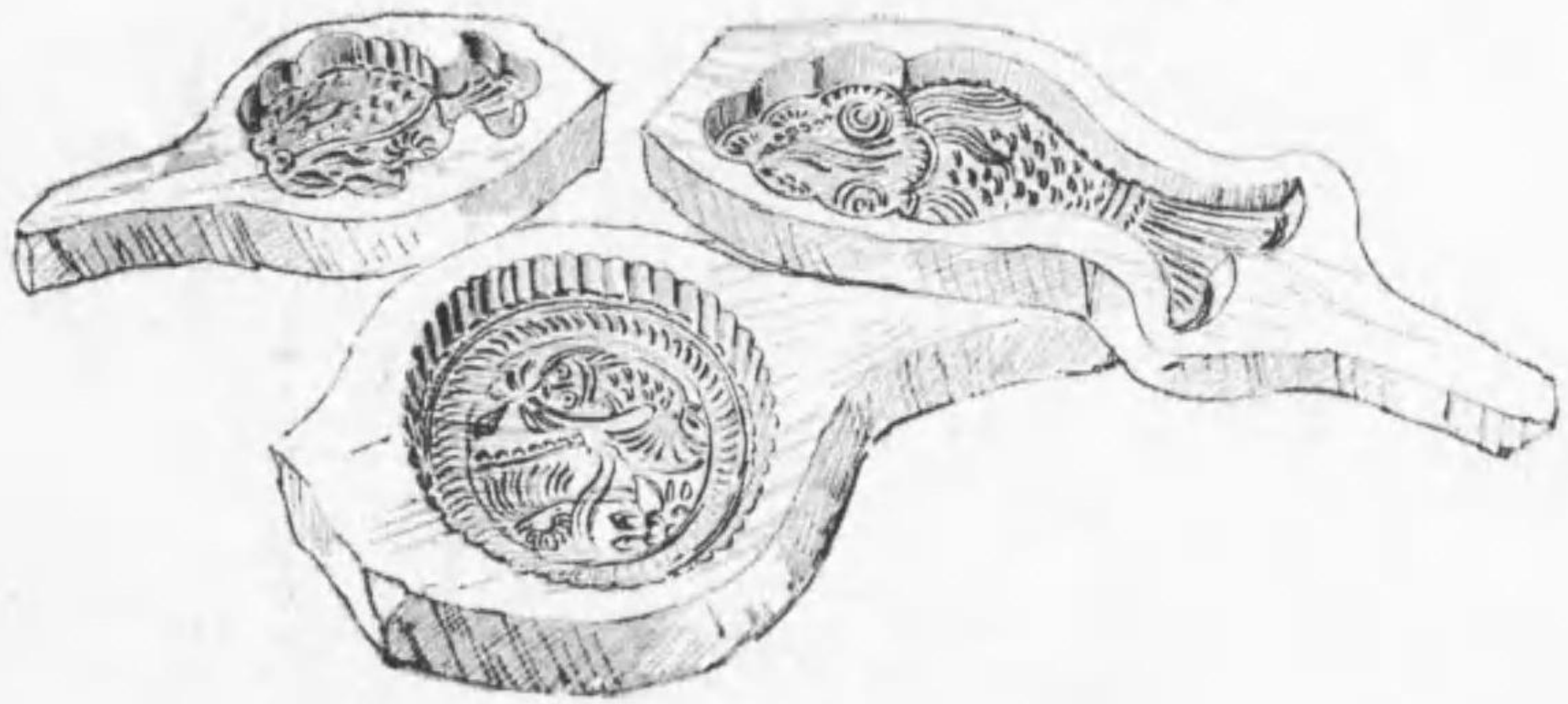
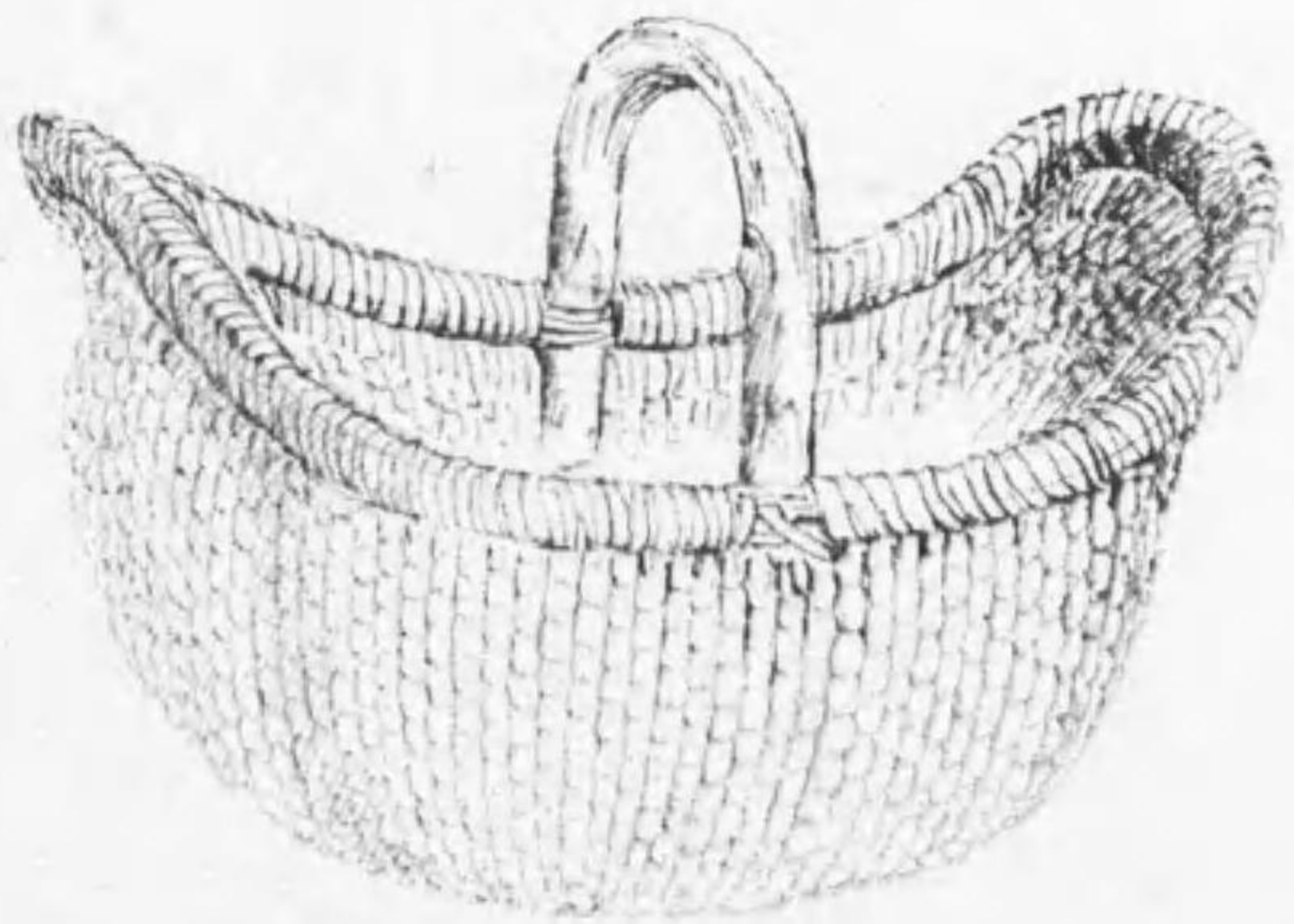
- 油 簾 巾 四十五匁
- 鹽菜簾 〃 二十匁
- 扁 壺 〃 二十五匁



手提籠

柳條でつくられ、柳行李のやうな編み方である。横糸には太い麻糸を用ひ、把手は同じく太い柳の枝である。相當の重量物を入れてもこの把手は抜けない組織になつてゐる。軽くして、持ちよく、丈夫で長き使用に堪へるといふ本品の如きは、凡ゆる實用品の第一條件を具備してゐるものといふことが出来やう。

巾 三十七匁



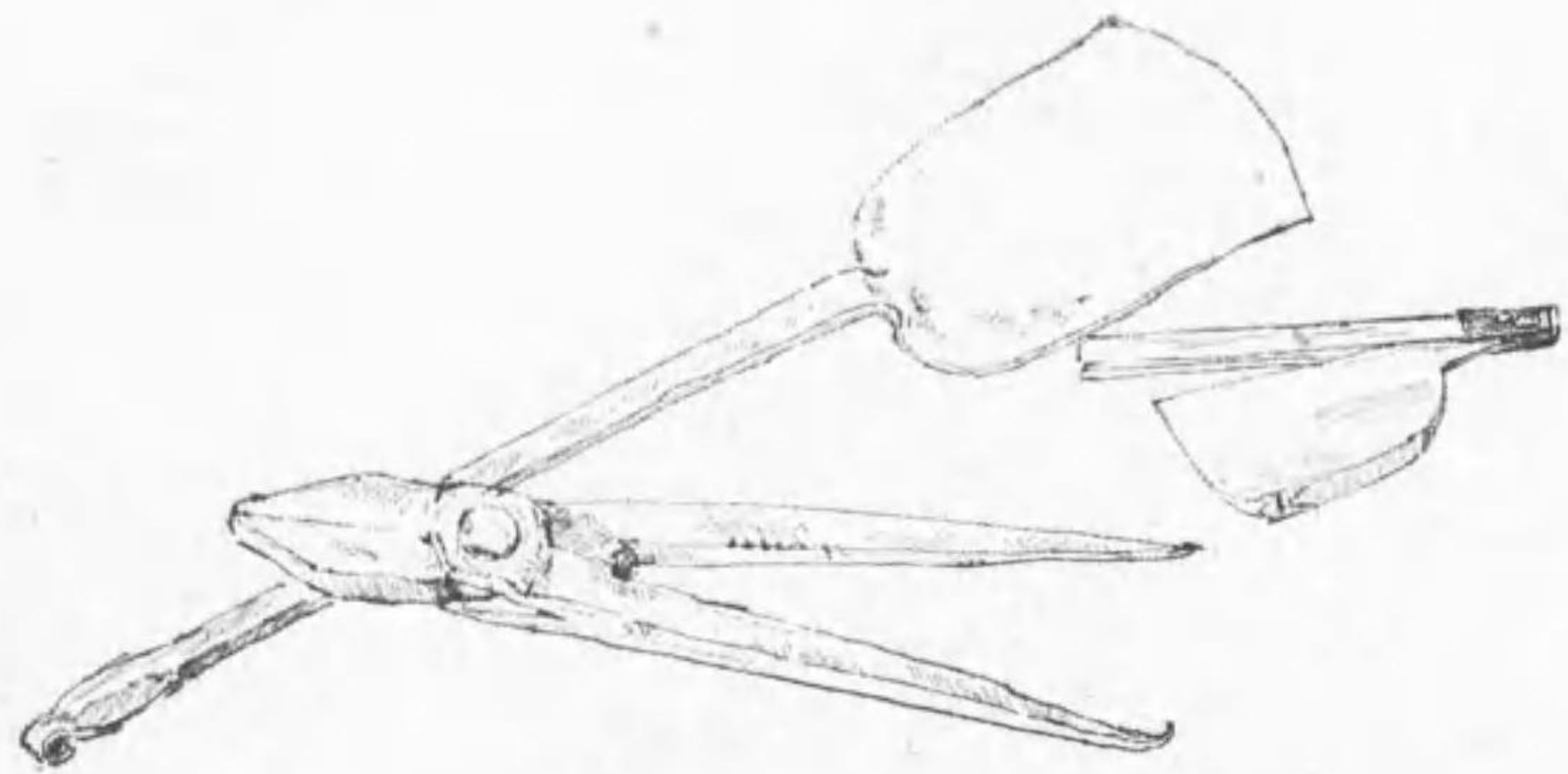
點心模子

菓子型である本品は他の多くの物と同じやうに華人日用の雜器に過ぎないけれども、金魚の意匠と彫りの巧みなことには感心をする。これは長い間の經驗から得た知識でもあらう。牝型としての刀の驅使、又その練達した構圖の巧みさである。實用一方のものだから、木材は單に切り離しの儘で少しの加工をも施さぬ。小綺麗に仕上げることは無駄とでも思つてゐるのであらう。我が工人には辛抱の出来ない仕事だが、しかし其處に華人の功利的な一面を窺ふことも出来やう。

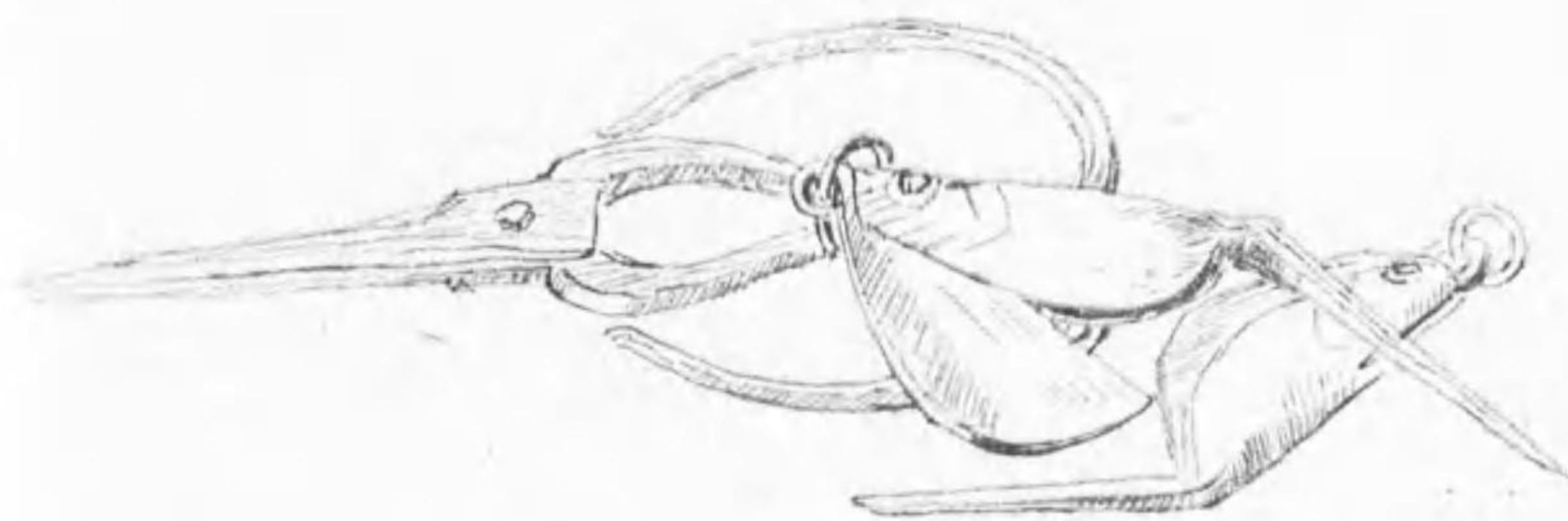
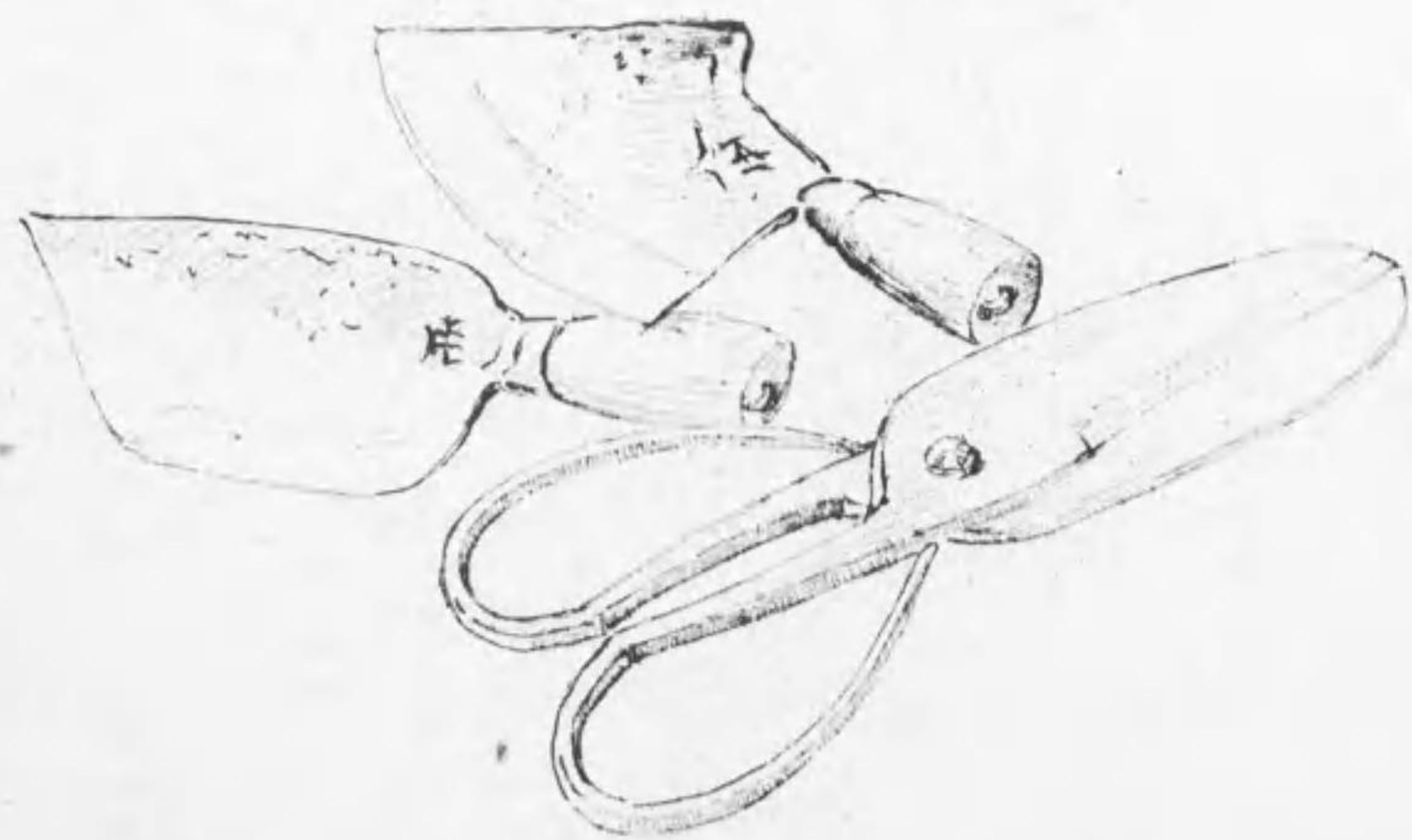
右ヨリ 長サ 二十五匁

” 三十二匁

” 十七匁



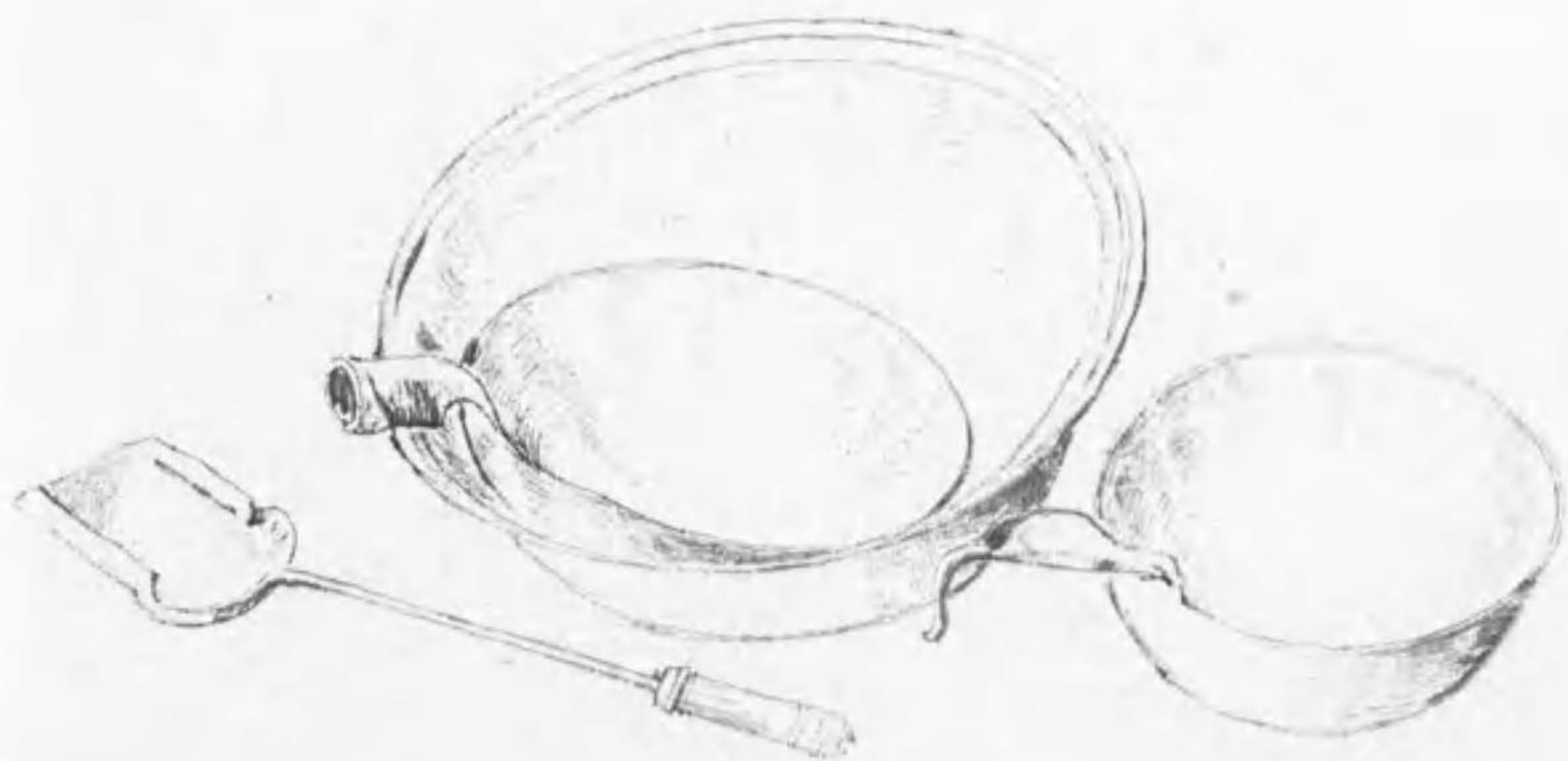
總べて鐵材である。庖丁は用途によつて形を異にするけれども、柄のつけ方はいづれも丈夫に出来てゐる。靴工が革を裁つ爲に用ひる双物の砥石は柳材である。恰も剃刀の研皮のやうなものである。魚形の小刀は支那の上古時代からあつたものだが、魚の形は實用から考へつたもので鞘は丁度魚の尾の如く、しかも錐の用途を兼ねてゐる。兎に角双物の切れ味は皆鋭い。十能の形をした道具は鑢といつて炒餅などを鍋からすくひ上げる器である。

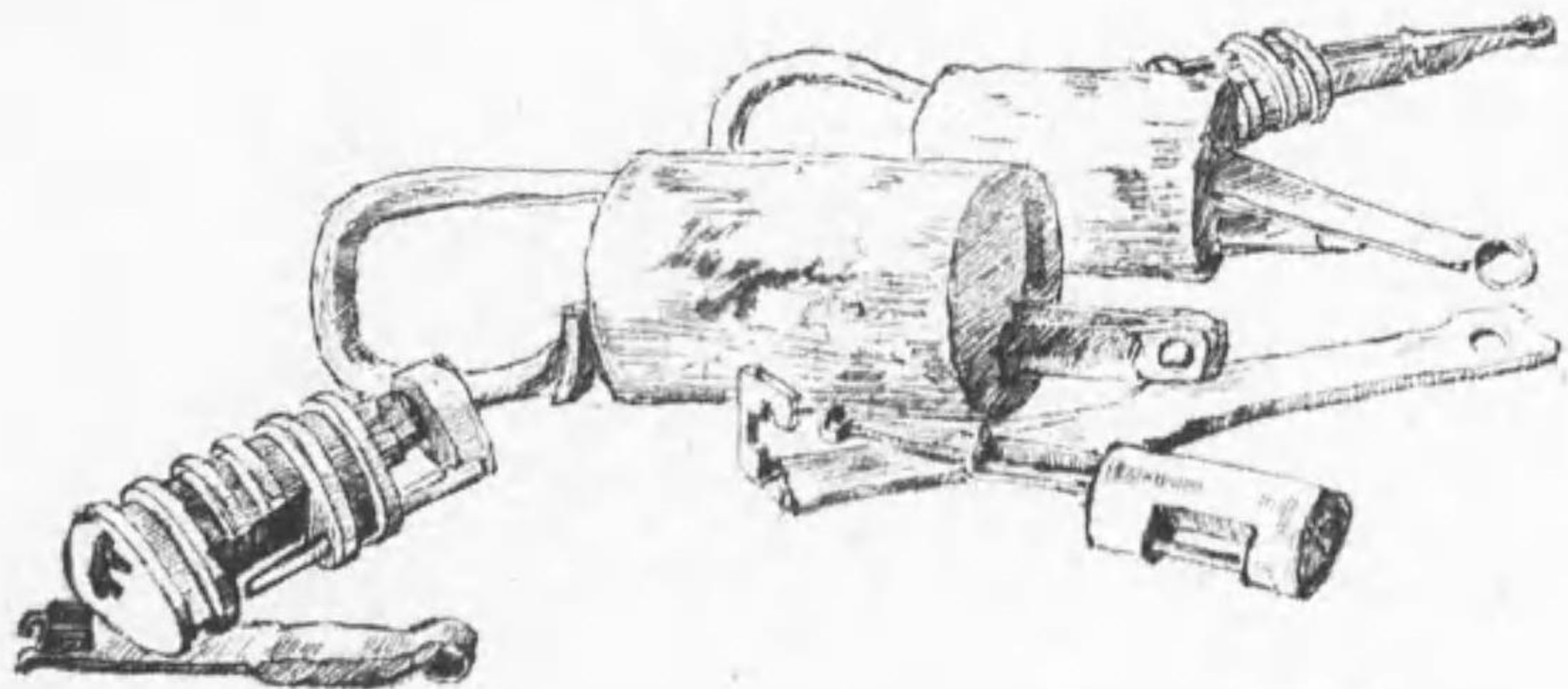


鍋と十能

厨房用の鍋三種、鐵と眞鍮鍋は打ち出しであつて大形のは鐵の鑢物である。眞鍮鍋は握りあり、その尖端を回曲せしめて掛け金とした。握りには技巧を施し使用に便ならしめてゐる。打ち出した鍋には形の大小がある。工賃の低廉なる華人にして始めて打ち出し鍋のやうなものが出るのであつて、我が工人の作ならば小さい鍋でも數十圓以上の高價なものとならう。嘗てのやうに鐵工の盛であつた頃と異り、鑢物の鍋は比較的鮮ないけれども、兎に角打ち出し鍋の方が親し味があるやうに思ふ。

- 十能 長サ 四十一極
- 銀鍋(打ち出し)直徑 二十八極
- 〃(鑢物)〃 三十七極
- 眞鍮鍋 〃 二十四極





錠

華人は生存上から物質を確保する必要があり、長い間その習慣に養はれ、凡ゆるものに錠を用ひてゐる。常に不安を感じながら生活してゐる彼等は、錠をかけることによつて僅かに安心を求めてゐるのである。従つて支那錠には精密な構造のものも亦多い譯で、佛蘭西と共に世界の知られた錠の國だといへる。圖版に寫した四種の錠前は庶民の使用する粗雑なものに過ぎないけれども、形に民藝的なものがあり精緻を誇らざるところに興味がもてる。これでも機械的構成であり、幼稚とはいへ科学的な推理から出来てゐるのである。

長サ 十七種、十六種、十一種、五種

馬 鈴

(上)



馬の首にかける鈴である。臘脂色の毛織物は皮紐を蔽ふてゐる。馬の歩みにつれ、小鈴の音は快適な感じを與へることであらう。鈴の形は我國のものと同様を異にしてをり、半圓形の眞鍮二つを蠟着けにし、鈴口は鐘と錘とであけてゐる。技術的には極めて原始的ではあるが、それが却つて一種の趣を添へてゐる鑄物である。

紐ノ長サ 二米二十種

(下)

皮紐を臘脂色の毛織物で包んだ馬の首鈴で、鈴は一個。打鐘は二本のたゞいた鐵である。もう一種の小形のは馬にも用ひられるだらうが山羊、羊などの首につけられるもの。鈴は眞鍮。

紐ノ長サ 二米二十種



目次

序	.....	一
支那庶民常用の工藝	.....	五
支那の本格的民藝	.....	九
漢人の色感	.....	六
支那の傳統的な文様の考察	.....	九
龍	.....	三
饕餮	.....	六
鳳	.....	元
麒麟と獏	.....	三
龜、鹿、蝙蝠、蝴蝶、魚介、植物其他	.....	三
吉祥文	.....	三
圖版	.....	三
金工	.....	元
藥罐と手爐、湯沸し二品、蒙古乳注と肉池、飾笠、如意形香爐	.....	元
竹皮製六角小箱と漆皮手筒、手提・酒杯・小皿	.....	四
木工藝と竹細工	.....	四
丸形竹製曲げ物と籐編碁石入、竹製品三品、竹製提げ籠と籐の編籠、明時代の籠彫建築裝飾、六角小宮と印鑑櫃、朱塗桃型蓋物と丸形蓋物、小箱三種、折疊引出付鏡臺、螺鈿小箱、手提と小盥、虫籠	.....	四
漆器について	.....	五
藥盒形蒔繪手箱、朱塗菓子器と蓋物、漆皮の蓋物二品、漆皮食盒・中皿と茶托、漆皮彈藥盒、革製帽子入、鏡、火鎌子、蒙古刀子	.....	五
硝子作品二種	.....	五
七寶	.....	六
七寶・卷葉入と肉掛、七寶とエナメルの工藝	.....	六
照明器	.....	七
カンテラ燭臺、紗燈、牛角燈	.....	七
蛇皮タンバランと拍板、太鼓	.....	七
劇假面と青龍刀、赤帽人形と猿人形老虎、靴、團扇	.....	七

花鳥文刺繍、花鳥文毛氈	.....	八四
支那の染織	.....	八四
絁、太原織綿絨布、西藏十字文毛織、絨毯	.....	八四
北支の民窯	.....	八九
雜器としての	.....	九一
椅子と小燈子、箕・掛籠其の他、油籠・鹽菜籠、手提・蒸籠・卸しと釣瓶、抑條手提と籠其の他、手提籠、點心摸子、鍋と十能、叉物・鏟とパンス、錠、馬鈴	.....	九一

巻頭序文のうちで述べたやうに、今回百貨店高島屋樓上で展覧さるゝ支那庶民常用の雜器、或は民藝ともいふやうな調度什器の類は華北交通會社並に高島屋の絶大なる援助と犠牲によつて蒐集されたものであるが、いふまでもなく今日の如き時局下に於て外地より之を輸入し、展覧せんとするには多大の面倒と困難が伴ふを常とするが、當局の理解と好意は愈々吾人の宿望を實現し得たのである。陳列品一千數百點といへば相當夥しい數ではあるが、支那大衆向の工藝下手雜器、民藝の一般から見れば僅かにその一部分といふべき品數であり、しかも吾人の參考に資すべき品目の選擇に就ては未だ充分とはいへぬけれども、恐らくは不足した分を填補しつゝ、近き將來に於て完璧な蒐集を見ることであらう。

本書を編むに當り、蒐集品全部の種目、形式、素材等を細別し、觀賞と研究に便じたいと考へたのであつたが、圖版の構圖と多少の錯綜を餘儀なくしたが、苦心も又其處にあつたといへよう。兎に角、本展覧が有効にはたらき、我が工藝家と業者に資するところがあつて、進んでは日支關係の上に齎すものがあつたとすれば、それは實に吾人の幸福のみではないと思ふ。

編者

昭和十七年十二月二十五日印刷  
昭和十七年十二月三十日發行  
東京市品川區大崎長者九二六一  
發行人 大 岡 三  
東京市京橋區錦町八丁目二番地  
印刷人 大 江 恒 吉  
東京市京橋區錦町八丁目二番地  
印刷所 大江美術印刷社



933  
482

終

